

修正箇所は下線を引くこと
適用は ☒ 印を記入する。

3. 使用建築材料表・使用構造材料一覽表

- | 適用箇所 | | 設計基準強度
Fc = N/mm ² | 品質基準強度
Fq = N/mm ² | スランプ cm
(スランフロー) | 比重
γ = kN/m ³ | 備 考 |
|----------|---|----------------------------------|----------------------------------|---------------------|-----------------------------|-----------------|
| 階 | 部位 | | | | | |
| 備考
参照 | 柱 梁 壁
床版 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> | 2 4 | 2 4 | 1 8 | | 3階柱壁以上 |
| | 柱 梁 壁
床版 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> | 2 7 | 2 7 | 1 8 | | 2階柱壁以上
3階梁床迄 |
| " | 柱 梁 壁
床版 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> | 3 0 | 3 0 | 1 8 | | 1階柱壁以上
2階梁床迄 |
| | 柱 梁 壁
床版 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> | | | | | |

<input type="checkbox"/> 床版	<input type="checkbox"/>			
<input checked="" type="checkbox"/> 基礎	<input checked="" type="checkbox"/> 地中梁	30	30	18


- | | | | | | |
|-----------------------------|---|------------------------------|-------------------------------|--------------------------|--|
| <input type="checkbox"/> 基礎 | <input type="checkbox"/> 地中梁 | | | | |
| <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | | | | |
| 土間コンクリート | <input type="checkbox"/> 18 | | 15 | | |
| 捨てコンクリート | <input type="checkbox"/> 18 | | 15 | | |
| セメントの種類 | <input checked="" type="checkbox"/> 普通ポルトランドセメント <input type="checkbox"/> 中熱ポルトランドセメント
<input type="checkbox"/> 低熱ポルトランドセメント | | | | |
| 細骨材の種類 | <input type="checkbox"/> 砂 | <input type="checkbox"/> 山砂 | <input type="checkbox"/> 砕砂 | | |
| 粗骨材の種類 | <input type="checkbox"/> 砂利 | <input type="checkbox"/> 碎石 | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | |
| 水の区分 | <input type="checkbox"/> 水道水 | <input type="checkbox"/> 地下水 | <input type="checkbox"/> 工業用水 | <input type="checkbox"/> | |
| 構造体コンクリート強度を | 材齢 (●28日 □56日 □91日) | | | | |

セメント量	<input checked="" type="checkbox"/> 27.0%以下	<input type="checkbox"/> 高性能減水剤	<input type="checkbox"/>
混和剤	<input type="checkbox"/> AE減水剤	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
空気量	<input checked="" type="checkbox"/> 4.0~6.0%	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
塩化物量	<input checked="" type="checkbox"/> 0.3kg/m ³ 以下	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
水セメント比	<input checked="" type="checkbox"/> 65%以下	<input type="checkbox"/> 55%以下	<input type="checkbox"/>

(2) コンクリートブロック (☐ JIS A 5406)

- | (3) 鉄筋 | | | | |
|----------------------|---------|---------|---------|--------------------------------------|
| 鉄 筋 | 種 類 | 使用径mm | 使用箇所 | |
| 異形鉄筋
(JIS G 3112) | ● SD295 | D10～D16 | 全 て | ● 垂ね継手 (D10～D16)
● ガス圧接継手 (D19以上) |
| | ● SD345 | D19～D25 | 柱、梁、基礎梁 | |
| | ● SD390 | D32 | 杭頭補強筋 | |
| | □ | | | □ 機械式定着工法 |

- | | | | | |
|-----------|--|------------|----|---------------------------------|
| | <input type="checkbox"/> | | | |
| | <input type="checkbox"/> | | | |
| 高強度せん断補強筋 | <input type="checkbox"/> 685 | | | <input type="checkbox"/> 大臣認定番号 |
| | <input type="checkbox"/> 785 | | | |
| | <input checked="" type="checkbox"/> 1275 | U10.7 | 柱 | |
| | <input type="checkbox"/> | | | |
| せん断補強筋 | <input checked="" type="checkbox"/> 316 | 6本×150×150 | 基礎 | |

- 注1) SD490をガス圧接する場合は施工前に試験を行うこと。
注2) 各継手の使用詳細については本仕様書の2の9. (2) 鉄筋の項の鉄筋継手の項に  にて表示すること。

- | (4) 鉄骨 | | | 使用箇所 | 現場溶接 | JIS規格・認定番号等 |
|---------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|------------------------|--|-------------|
| <input type="checkbox"/> SN400A | <input type="checkbox"/> SN400B | <input type="checkbox"/> SN400C | 大梁(端部)・片持梁 | <input type="checkbox"/> 有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 | JIS G 3136 |
| <input type="checkbox"/> SN490B | <input type="checkbox"/> SN490C | <input type="checkbox"/> | 大梁(端部)・ δ 1775A | <input type="checkbox"/> 有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 | JIS G 3136 |
| <input type="checkbox"/> SS400 | <input type="checkbox"/> SS490 | <input type="checkbox"/> | 大梁(中央)・小梁 | <input type="checkbox"/> 有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 | JIS G 3101 |

- | | | | | |
|---------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|---|----------------------|
| <input type="checkbox"/> SM400A | <input type="checkbox"/> SM490A | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> 有 <input type="checkbox"/> 無 | JIS G 3106 |
| <input type="checkbox"/> BCR295 | <input type="checkbox"/> BCP235 | <input type="checkbox"/> BCP325 | <input type="checkbox"/> 有 <input type="checkbox"/> 無 | 大臣認定品 認定番号 MSTL-0391 |

- | | | | | |
|--------------------------|--------------------------|-------------------------------------|--|-------|
| <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input checked="" type="checkbox"/> | | |
| 溶接材料 | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | | JIS Z |

- (5) ボルト等

- ☐高力ボルト
☐F10T (JIS B1186) ☐S10T 大臣認定番号() (☐M16, ☐M20, ☐M22, ☐M24, ☐)

- ☐ボルト (JIS B1180) M12 ☒4.8 (4T) ☐6.8 (6T) ☐8.8 (8T) ☐10.9 (10T)

- ☐ アンカーボルト（ISベア工法及び同等品） ※銘骨柱部材フィキストによる

☐ 露出型弾性固定柱脚工法（大臣認定品又は日本建築センターの評定品）は下記による。

 - 設計断面を満足できる工法で下記メーカーのいずれかとする。

ハイベース、ベースバック、NCベース、ISベース及び同等品

<input type="checkbox"/> SS400	M	L = mm	ナット（ <input type="checkbox"/> シングル、 <input type="checkbox"/> ダブル）
<input type="checkbox"/> ABR400	M	L = mm	ナット（ <input type="checkbox"/> シングル、 <input type="checkbox"/> ダブル）(JIS B 1220)

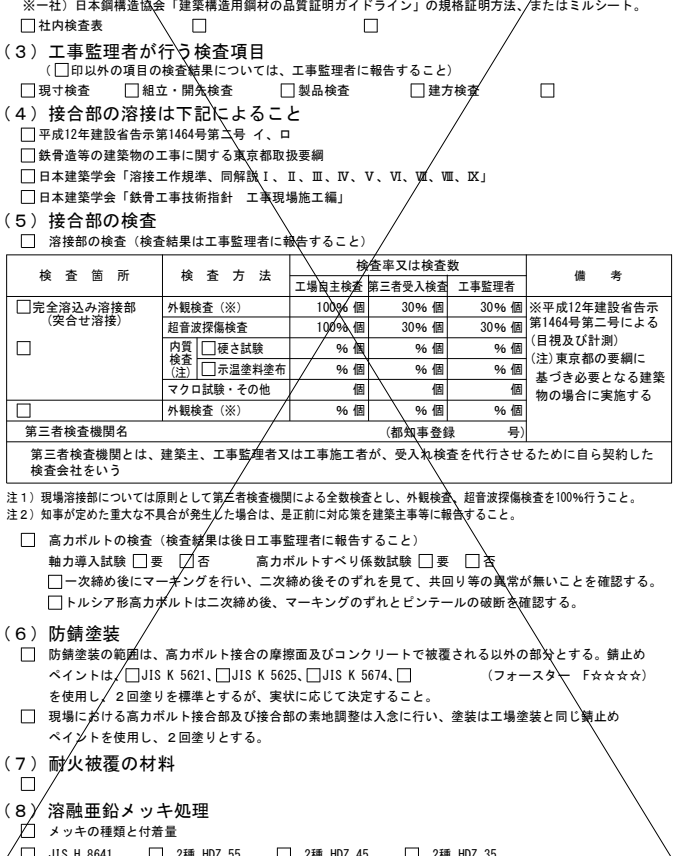
☐ 頭付スタッド (JIS B1198)

φ =	L = mm	使用箇所（ <input type="checkbox"/> 柱 <input type="checkbox"/> 大梁 <input type="checkbox"/> 小梁 <input type="checkbox"/> 床間柱 <input type="checkbox"/> 大梁 <input type="checkbox"/> 小梁）
-----	--------	---

6. 鉄骨工事（施工方法等計画書）

- (1) 鉄骨工事は指示のない限り下記による
- ☐ 日本建築学会「JASS5 2015年度版」「鉄骨精度検査基準」「鉄骨工事技術指針」
 - ☐ 一般社団法人鉄骨協会「建築鉄骨工事指針」
 - ☐ 鉄骨製作管理技術者登録機構「突合せ継手の食い違い仕口のずれの検査・補強マニュアル」
- (2) 工事監理者の承認を必要とするもの
- ☐ 製作工場 ☐ 製作要領書 ☐ 工作図 ☐ 施工計画書
 - ☐ 認定または登録工場（大匠認定 S H M ® J グレード 都登録 T1 T2 T3 ランク）
 - ☐ 材料規格証明書※、または試験成績書 ※工事規模に応じたグレード以上の認定工場
 - ☐ 鋼材 ☐ 高力ボルト ☐ 特殊溶剤 ☐ 頭付スタッド

- ☐ 鋼材 ☒ 高力ボルト ☐ 特殊ボルト ☐ 頭付スタッド



- | 検査箇所 | 検査方法 | 検査率又は検査数 | | | 備考 |
|---|-------------------------|-----------|---------|-------|--|
| | | 工増主検査 | 第三者受入検査 | 工事監理者 | |
| <input type="checkbox"/> 完全込み込み溶接部
(突合せ溶接) | 外観検査(※)
超音波探傷検査 | 100%個 | 30%個 | 30%個 | ※平成12年建設省告示
第1464号第二号による
(目視及び計測)
(注)東京都の要綱に
基づき必要となる建築
物の場合に実施する |
| <input type="checkbox"/> | 内蔵
検査
(注) 示通資料に基づ | %個 | %個 | %個 | |
| | マクロ試験・その他 | %個 | %個 | %個 | |
| <input type="checkbox"/> | 外観検査(※) | %個 | %個 | %個 | |
| 第三者検査機関名 | | (都知事登録 号) | | | |
| <p>第三者検査機関とは、建築主、工事監理者又は工事施工者が、受入る検査を代行するために自ら契約した検査会社をいう</p> | | | | | |

- (6) 防錆塗装
- ☐ 防錆塗装の範囲は、高力ボルト接合の摩擦面及びコンクリートで被覆される以外の部分とする。錆止めペイントは、☐ JIS K 5621、☐ JIS K 5625、☐ JIS K 5674、☐ (フォースター F☆☆☆☆) を使用し、2 回塗りを実施するが、実状に応じて決定すること。
- ☐ 現場における高力ボルト接合及び接合部の素地調整は入念に行い、塗装は工場塗装と同じ錆止めペイントを使用し、2 回塗りとする。

- ## 7. 設備関係
- 令第129条の2の3の事項 ※設計が該当する場合には **●** 印を記入する。
- ・建築物に設ける建築設備にあつては、構造耐力上安全なものとして、以下の構造方法による。
- 建築設備（昇降機を除く。）、建築設備の指示構造部及び緊結金物は、腐食又は腐朽のおそれのないものと

7. 設備関係

- 令第129条の2の3の事項 ※設計が該当する場合には ㊦ 印を記入する。
- ・建築物に設ける建築設備にあっては、構造耐力上安全なものとして、以下の構造方法による。
- ㊦ 建築設備（昇降機を除く。）は、建築設備の指示構造部及び緊固金物、腐食又は腐朽のおそれのないものとする。
- ㊦ 屋上から突出する水槽、煙突、冷却塔その他これらに類するもの（以下「屋上水槽等」といふ。）、支持構造部又は緊固構造部上主要な部分に、支持構造部又は緊固構造部上主要な部分に緊着すること。
- ㊦ 煙突の屋上突出部の高さは、せんがくで、石造、コンクリートブロック造又は鉄筋コンクリート造の場合は

□ 煙突では厚みのある部分は、鉄筋に対するコンクリートの厚さが厚さ5cm以上とし鉄筋コンクリート造、又は厚さが25cm以上の無筋コンクリート造、れんが造、石造としはコンクリートブロック造とする。

● 建築物に設ける給排水、排水その他の配管設備（給湯設備を除く）は、

○ 風圧、土圧、水圧及び地震等その他の振動及び衝撃に対して安全上支障のない構造とする。

○ 建築物の部分を通ずる配管する場合には、当該建築物部分に配管スペースを設ける等有効な管の振動防止のための措置を講ずる。

○ 管の伸縮その他の変形による当該管に損傷が生ずるおそれがある場合において、伸縮継手又は可撓継手を用いる等の振動防止のための措置を講ずる。

○ 管を通ずるものは、変形防止の目的において、φ100管又は防振ブロックを用いる等有効な措置の取

及び街路の緩和その他の措置を講ずること。

● 法第20条第1号から第3号までの建築物に設ける屋上水槽等については、平成12年建設省告示第1389号により、風圧並びに地震その他の震動及び衝撃に対して構造耐力上安全なものとする。

● 給湯設備は、風圧、土圧及び水圧並びに地震その他の震動及び衝撃に対して安全上支障のない構造とする。満水時の重量が15kgを超える給湯設備については、地震に対して安全上支障のない構造として、平成12年建設省告示第1388号第5に規定する構造方法によること。

○ 給湯設備：建築物に設置する常圧給湯設備の他の給湯設備として、雨水槽等の給湯設備に設置するものを除くもの。

8. その他

- 諸官庁への届出書類は遅延なく提出すること。
- 各試験の供試体は公的試験機関にて試験を行い工事監理者に報告すること。
- 必要に応じて記録写真を撮り保管すること。

構造設計特記仕様（2）

・修正箇所は下線を引くこと
適用は ❶ 印を記入する。

9. 鉄筋コンクリート工事

（1）コンクリート

鉄筋コンクリート工事の施工に関しては記載無きは、JASS 5 2015 による。

（a）コンクリートの仕様

本仕様書では、JASS 5に規定する普通骨材を用いた一般仕様のコンクリートを「普通コンクリート」と定義し、表9.1に示す様に設計基準強度が36N/mm²以下のコンクリートについてはJASS5の3節～11節を適用し、36N/mm²を超えるコンクリートについてはJASS5の17節（高強度コンクリート）を適用する。
また、設計基準強度もしくは品質基準強度と構造体強度補正值から定める調合管理強度以上とし、免注するレディーミクストコンクリートの呼び強度が表9.2に示すJIS規格外となる場合は、法37条の大臣認定を受けた製品を用いる必要がある。
軽量コンクリートについてはJASS 5の14節によること。

表9.1 コンクリート圧縮強度 (N/mm²) に応じた仕様書の使い分け

設計基準強度 F _c	18	21	24	27	30	33	36	39	42	45	48	51	54	57	60
JASS 5での区分	普通コンクリート							高強度コンクリート							

表9.2 レディーミクストコンクリートのJIS規格品

調合管理強度 (N/mm ²)	21	24	27	30	33	36	39	42	45	48	51	54	57	60	60超
-----------------------------	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

呼び強度 (JIS規格品)	21	24	27	30	33	36	40	42	45	50	55	60	60	※
---------------	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---

※印は規格外

（b）品質と施工

❶ 構造体の計画供用期間の級は特記による。特記が無い場合は標準とする。

❶ 標準 ❶ 長期 ❶ 超長期

❶ コンクリートは JIS A 5308（レディーミクストコンクリート）に適合するJIS認証工場の製品とする。

❶ 設計基準強度が 36N/mm²を超えるコンクリートを扱うレディーミクストコンクリート工場は、「高強度コンクリート」の製品認証を受けているか、建築基準法第37条第二号によって国土交通大臣が指定建築材料として認定した高強度コンクリートの製造工場とする。

❶ レディーミクストコンクリート工場および高強度コンクリートを打設する施工現場には、コンクリート主任技士またはコンクリート技士、あるいはこれらと同等以上の知識経験を有すると認められる技術者が常駐していなければならない。

❶ 施工者は、工事に先立ち、コンクリートの調合・製造計画、施工計画、品質管理計画書を作成し、工事監理者の承認を得ること。

❶ フレッシュコンクリートの流動性は、スランプまたはスランプフローで表し、設計基準強度が 36 N/mm²以下 33N/mm²以上の場合スランプ21cm以下、33N/mm²未満の場合スランプ18cm以下とし、設計基準強度が 36 N/mm²超 45 N/mm²未満の場合はスランプ 21 cm以下またはスランプフロー 50 cm以下、設計基準強度が 45 N/mm²以上の場合は、スランプ 23 cm以下またはスランプフロー 60 cm以下とし、特記による。

❶ コンクリートに含まれる塩化物量は、塩化物イオン量として 0.3 kg/m³以下とする。

❶ コンクリートの練混ぜから打込み終了までの時間は、原則として120分を限度とする。

❶ コンクリート打込み時の自由落下高さは、コンクリートが分離しない範囲とする。

❶ 打継ぎ部は構造的に影響の少ない位置を選び打継ぎ処理を行い、打込み前に十分な水湿しを行う。

❶ 打込み後の湿潤養生の期間は、セメントの種類および設計基準強度に応じて3日以上とする。

❶ コンクリートの充填方法等はJASS5-7節8節に準拠する。

（c）調合および構造体コンクリート強度

i）高強度コンクリート

❶ 調合強度を定めるための基準とする材齢は、特記による。特記のない場合は 28日とする。

❶ 構造体コンクリート強度を保証する材齢は、特記による。特記のない場合は 91日とする。

❶ 構造体コンクリート強度は、次の①または②を満足するものとする。

① 標準養生した供試体による場合、調合強度を定めるための基準とする材齢において

調合管理強度以上とする。

② 構造体温度養生した供試体による場合、構造体コンクリート強度を保証する材齢において

設計基準強度に 3 N/mm²加えた値以上とする。

❶ 調合管理強度は、以下による。

・F_m = F_c + ・S_c (N/mm²)

・F_m : 高強度コンクリートの調合管理強度 (N/mm²)

F_c : コンクリートの設計基準強度 (N/mm²)

・S_c : 高強度コンクリートの構造体強度補正值で JASS5 による。

❶ 調合強度は標準養生供試体の圧縮強度で表すものとし、下記の両式を満足するように定める。

・F ≥ ・F_m + 1.73 σ_H (N/mm²)

・F ≥ 0.85・F_m + 3 σ_H (N/mm²)

・F : 高強度コンクリートの調合強度 (N/mm²)

σ_H : 高強度コンクリートの圧縮強度の標準偏差 (N/mm²) で、レディーミクストコンクリート工場の実績による。実績がない場合は、0.1 (F_c+・S_c) とする。

ii）普通コンクリート

❶ 調合強度を定めるための基準とする材齢は、原則として 28日とする。

❶ 構造体コンクリート強度は表9.3を満足すれば合格とする。

表9.3 構造体コンクリート圧縮強度の判定基準

供試体の養生方法	試験材齢 ⁽¹⁾	判定基準
標準養生 ⁽²⁾	28 日	X ≥ F _m
コ ア	91 日	X ≥ F _q

ただし、X：1回の試験における3個の供試体の圧縮強度の平均値 (N/mm²)

F_m：コンクリートの調合管理強度 (N/mm²)

F_q：コンクリートの品質管理強度 (N/mm²)

[注] (1) 早い材齢において試験を行い、合否判定基準を満たした場合は、合格とする。

(2) 工事監理者の承認を得て、供試体成型後、翌日までは20±10℃の日光および風が直接当たらない箇所ので、乾燥しないように養生して保管することができる。

* 標準養生供試体の代わりにあらかじめ準備した現場水中養生供試体によることができる。

その場合の判定基準は材齢28日までの平均気温が20℃以上の場合は、3個の供試体の圧縮強度の平均値が調合管理強度以上であり、平均気温が20℃未満の場合は、3個の供試体の圧縮強度の平均値から 3 N/mm²を減じた値が品質管理強度以上であれば合格とする。

* コア供試体の代わりにあらかじめ準備した現場封かん養生供試体によることができる。

その場合の判定基準は材齢28日を超え91日以内のn日において3個の供試体の圧縮強度の平均値から 3 N/mm²を減じた値が品質管理強度以上であれば合格とする。

❶ 調合管理強度は、以下による。

F_m = F_c + ・S_c

F_m : コンクリートの調合管理強度 (N/mm²)

F_c : コンクリートの品質基準強度 (N/mm²)

・S_c : 標準養生した供試体の材齢 m 日における圧縮強度と構造体コンクリートの n 日における

圧縮強度の差における構造体強度補正值 (N/mm²)

❶ 調合強度は標準養生供試体の材齢 m 日における圧縮強度で表すものとし、下記の両式を満足するように定める。調合強度を定める材齢 m 日は、原則として 28 日とする。

F ≥ F_m + 1.73 σ_H (N/mm²)

F ≥ 0.85F_m + 3 σ_H (N/mm²)

F : コンクリートの調合強度 (N/mm²)

σ : 使用するコンクリートの圧縮強度の標準偏差 (N/mm²) で、レディーミクストコンクリート工場の実績による。実績のない場合は、2.5N/mm²、または0.1F_cの大きい方の値とする。

（d）検査

❶ フレッシュコンクリートの塩化物測定は、原則として工事現場で（一財）国土開発技術センターの技術評価を受けた測定器を用いて行い、試験結果の記録及び測定器の表示部を一回の測定ごとに撮影した写真（カラー）を保管し、工事監理者の承認を得る。測定検査の回数は、通常の場合1日1回以上とし、1回の検査における測定試験は、同一試料から取り分けて3回行い、その平均値を試験値とする。

❶ スランプの許容値は普通コンクリートの場合、スランプが 8cm以上18cm以下の場合±2.5cm、21cmの場合±1.5cm（呼び強度27以上で高性能AE減水剤を使用する場合は±2cm）とする。
高強度コンクリートの場合は、スランプが 18cm以下の場合±2.5cm、21cm以上の場合±2cmとし、スランプフローの許容差は、目標スランプフローが 50cm以下の時±7.5cm、50cmを超える時は±10cmとする。

❶ 使用するコンクリートの圧縮強度試験は、普通コンクリートでは標準養生を行った供試体を用いて材齢 28日で行い、1回の試験は、打込み区ごと、打込み日ごと、かつ 150m³またはその端数ごとに3個の供試体を用いて行う。3回の試験で 1検査ロットを構成する。
高強度コンクリートでは、打込み日かつ 300m³ごとに検査ロットを構成して行う。1検査ロットにおける試験回数は 3回とする。検査は適当な間隔をあげた任意の 3台のトラックアジテータから採取した合計 9個の供試体による試験結果を用いて行う。検査に用いる供試体の養生方法は標準養生とする。

❶ 構造体コンクリートの圧縮強度の検査は普通コンクリートでは、打込み区ごと、打込み日ごと、かつ 150m³またはその端数ごとに 1回行う。1回の試験には適当な間隔をおいた 3台の運搬車から 1個ずつ採取した合計 3個の供試体を用いる
高強度コンクリートでは、打込み日、打込み区かつ 300m³ごとに行う。検査には適当な間隔をあげた任意の 3台のトラックアジテータから採取した合計 9個の供試体を用いる。
検査に用いる供試体の養生方法は標準養生または構造体温度養生とする。

❶ 使用するコンクリートの圧縮強度の判定は、JASS5による。

構造体コンクリートの圧縮強度の判定は、(c) 調合および構造体コンクリート強度による。

❶ コンクリートの試験は、「建築物の工事における試験および検査に関する東京都取扱要綱」

第4条の試験機関で行うこと。

試験・検査機関名 (都知事登録 号)
代行業者名 (登録番号 号)

代行業者とは、試験・検査に伴う業務を代行するものを言う。

（2）鉄 筋

（a）施工

❶ 鉄筋はJIS G 3112（鉄筋コンクリート用棒鋼）に適合するものを用いる。溶接金網及び鉄筋格子は、JIS G 3551（溶接金網および鉄筋格子）に適合するものを用いる。

❶ 高強度せん断補強筋は、技術評価を取得し、建築基準法第37条の材料認定を受けたものを用いる。

❶ 鉄筋の加工寸法、形状、鉄筋の継手位置、鉄筋の重ね長さ、定着長さは「鉄筋コンクリート構造配筋標準図(1)～(4)」による。

❶ 鉄筋の継ぎ手は重ね継手、ガス圧継手、機械式継手または溶接継手によることとし、鉄筋径と使用箇所を定め特記による。

表9.4 鉄筋の継手

鉄筋継手工法	継手の位置等の設計条件による仕様・等級				鉄筋の径	使用箇所
	(1) 引張力最小部位	(2) (1) 以外の部位 (注)				
		A 級	B 級	SA級		
<input checked="" type="checkbox"/> 重ね継手	標準図による				<input checked="" type="checkbox"/> D (16) 以下	
<input checked="" type="checkbox"/> 圧接継手	<input type="checkbox"/> 告示1463号第2項各号	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/> D (19) 以上	
<input type="checkbox"/> 溶接継手	<input type="checkbox"/> 告示1463号第3項各号	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/> D () 以上	
<input type="checkbox"/> 機械式継手	<input type="checkbox"/> 告示1463号第4項各号	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/> D () 以上	

注) (1) 以外の部位に設ける継手は、平成12年告示第1463号ただし書きに基づき、日本鉄筋継手協会、日本建築センター等の認定・評定等を取得した継手工法の等級で、構造計算にあたって『鉄筋継手使用基準（建築物の構造関係技術基準解説書 2007）』によって検討した部材の条件・仕様によること。

❶ 機械式継手および圧接継手および溶接継手は（公社）日本鉄筋継手協会「鉄筋継手工事標準仕様書」による他、所要の品質が得られるように工事計画および工事管理計画を定めて、工事監理者の承認を受ける。

❶ ガス圧接の施工は、強風時または降雨時には原則として作業を行わない。ただし、風除け・覆いなどの設備をした場合には、工事監理者の承認を得て作業を行うことができる。

❶ 圧接技量資格者は、（公社）日本鉄筋継手協会によって認証された技量適格性証明書を工事監理者に提出し、承認を受ける。

❶ 機械式鉄筋定着工法に用いる定着板には信頼できる機関による性能証明書等を取得した定着金物を用いる。

（b）検査

継手部の検査方法

各継手工法ごとの検査は平12年建告1463号による他、具体的な検査方法は、（公社）日本鉄筋継手協会の仕様書を参照のこと。

		表9.5 継手の検査					
継手工法		外観検査		引 張 試 験		超音波探傷試験	
1	ガス圧接	●有	%	<input type="checkbox"/> 有 <input type="checkbox"/> 無	%	個	●有 <input type="checkbox"/> 無 % 個
2	溶 接	<input type="checkbox"/> 有	%	<input type="checkbox"/> 有 <input type="checkbox"/> 無	%	個	<input type="checkbox"/> 有 <input type="checkbox"/> 無 % 個
3	機 械 式	<input type="checkbox"/> 有	%				<input type="checkbox"/> 有 <input type="checkbox"/> 無 % 個

ガス圧接部分の検査を超音波探傷検査によって行う場合、最初の数ロットについては引張試験も併用し、1回の引張試験は、3本以上とする。（1ロットは同一作業班が同一日中に作業した圧接箇所で 200箇所程度とする。）

❶ 鉄筋の継手の試験・検査は、「要綱」第4条の試験機関、又は第8条の検査機関で行うこと。

試験・検査機関名 (都知事登録 号)

鉄 筋 記 号

鉄 筋	D10	D13	D16	D19	D22	D25
記 号	・	×	∅	●	○	◎

（3）かぶり厚さ

❶ 最小かぶり厚さは、表9.6に規定する設計かぶり厚さを10mm減じた値とする。

❶ 設計かぶり厚さは、コンクリート打込み時の変形・移動などを考慮して、最小かぶり厚さが確保されるように、部位・部材ごとに定めるものとし、表9.6以上の値とする。

表9.6 設計かぶり厚さ（単位：mm）

構造体の計画供用期間の級		標準・長期		超長期	
部材の種類		屋 内	屋 外 ⁽²⁾	屋 内	屋 外 ⁽²⁾
構造部材	柱・梁・耐力壁	40	50	40	50
	床スラブ・屋根スラブ	30	40	40	50
非構造部材	構造部材と同等の耐久性を要求する部材	30	40	40	50
	計画供用期間中に維持保全を行う部材 ⁽¹⁾	30	40	(30)	(40)

直接土に接する柱・梁・壁・床および布基礎の上りり部分、擁壁の壁部分

基礎、擁壁の基礎・底版

注) (1) 計画供用期間の級が超長期で計画供用期間中に維持保全を行う部材では、維持保全の周期に応じて定める。
(2) 計画供用期間の級が標準、長期および超長期で、耐久性上有効な仕上げを施す場合は、屋外側では設計かぶり厚さを 10mm減じることができる。

❶ 完成した構造体の各部位における最外側鉄筋かぶり厚さは、最小かぶり厚さ以上とする。
❶ コンクリート構造体に誘発目地・施工目地などを設ける場合は、建築基準法施行令第79条に規定する数値を満足し、構造耐力上必要な断面寸法を確保し、防水上および耐久性上有効な措置を講じれば上記によらなくても良い。

（4）型 枠

❶ 型枠および支保工の存置期間は、昭和63年建告第1655号に基づき下表による。

表9.7 型枠存置日数		昭和46年建設省告示第110号（昭和63年改正建設省告示第1655号）				支 柱	
種 類 部 位	セメントの種類	せ き 板		ス ラ ブ 下		ス ラ ブ 下	
		基礎、梁側、柱、壁	スラブ下、梁下	スラブ下	梁下	スラブ下	梁下
コンクリートの材令(日)	15℃以上	2	3	4	6	8	17
	5℃～15℃	3	5	6	10	12	25
	5℃未満	5	8	10	16	15	28
コンクリートの圧縮強度		※ 5.0N/mm ²		設計基準強度の50%		設計基準強度の	
						85%	100%

※ JASS 5では普通コンクリートの場合計画供用期間の級が標準にあつては5N/mm²以上、長期及び超長期の場合は 10N/mm²以上、または高強度コンクリートの場合は 10N/mm²以上。
注) 1 片持ち梁、底、スパン 9.0m以上の梁下は、工事監理者の承認による。
注) 2 大梁の支柱の盛替えは行わない。また、その他の梁の場合も原則として行わない。
注) 3 支柱の盛替えは、必ず直上層のコンクリート打ち後とする。
注) 4 盛替え後の支柱頂部には、厚い受板、角材または、これに代わるものを置く。
注) 5 支柱の盛替えは、小梁が終わってからスラブを行う。一時に全部の支柱を取り払って盛替えをしてはならない。
注) 6 直上層に著しく大きい積載荷重がある場合においては、支柱（大梁の支柱を除く）の盛替えを行わないこと。
注) 7 支柱の盛替えは、養生中のコンクリートに有害な影響をもたらすおそれのある振動または衝撃を与えないように行うこと。

(有)新建築設計事務所

一級建築士 第 123921 号
黒木 博幸

【構造設計図書の作成】

(有)鎌田建築構造設計事務所

構造設計一級建築士 第 3187号

一級建築士 第89816号 鎌田 次雄

吉野東中学校校舎増築その他本体工事

構造設計特記仕様(2)

A3:NO SCALE

鹿児島市建設局建築部建築課

S-02

鉄筋コンクリート構造配筋標準図（１）

１．一般事項

１．１ 適用範囲

この配筋要領は、鉄筋コンクリート造、鉄骨鉄筋コンクリート造等の鉄筋工事に適用する。また、特記なき事項は公共建築協会編「公共建築工事標準仕様書（建築工事編）平成31年版」による。

１．２ 記号

d…異形棒鋼の呼び名に用いた数値 丸線では径 D…部材の底 R…直径
@…間隔 r…半径 C…中心線 Qo…部材間の内法距離 h o…部材間の内法高さ
S T…あばら筋 H O O P…帯筋 S H O O P…補強帯筋 φ…直径又は丸鋼

１．３ 鉄筋の表示記号

記号	●	×	∅	●	○	⊙	⊗	⊙
異形鉄筋	D10	D13	D16	D19	D22	D25	D29	D32

２．加工及び組立

２．１ 加工及び組立一般

- 鉄筋は、設計図書に指定された寸法及び形状に合わせ、常温で正しく加工して組み立てる。
- 有害な曲がり、損傷等のある鉄筋は、使用しない。
- コイル状の鉄筋は、直線状態にしてから使用する。この際、鉄筋に損傷を与えない。
- 鉄筋には、点付け溶接を行わない。また、アークストライクを起こしてはならない。

２．２ 加工

- 鉄筋の切断は、シーヤークター等によって行う。
- 次の部分に使用する異形鉄筋の末端部にフックを付ける。
 - (ア) 柱の四隅にある主筋の重ね継手及び最上層の柱筋
 - (イ) 梁の出隅及び下層の隅隅にある梁主筋の重ね継手（基礎梁を除く。）
 - (ウ) 煙突の鉄筋（壁の一部となる場合を含む。）
 - (エ) 杭基礎のベース筋
 - (オ) 帯筋、あばら筋及び補正筋

- 鉄筋の折曲げ形状及び寸法は、表2.1による。

折曲げ角度	折曲げ図	折曲げ内法直径(R)		
		SD295A、SD295B、SD345	SD295A、SD295B、SD345	SD390
		D16以下	D19～D38	D19～D38
180°		3d以上	4d以上	5d以上
125°				
90°				
125°及び90° (補正筋)				

- (注) 1. 片持スラブ先端、壁筋の自由端部の先端で90°フック又は135°フックを用いる場合には、余長は4d以上とする。
2. 90°未満の折曲げの内法直径は特記による。

２．３ 組立

鉄筋の組立は、鉄筋継手部分及び交差部の要所を径0.8mm以上の鉄線で結束し、適切な位置にスぺーサー、吊金物等を使用して、堅固に組み立てる。
なお、スぺーサーは、所定の位置に鉄筋を保持するとともに、作業荷重等に耐えられるものとする。また、鋼製スぺーサーは、型枠に接する部分に防錆処理を行ったものとする。

２．４ 継手及び定着

- 鉄筋の継手は、重ね継手、ガス圧接継手、機械式継手又は溶接継手とし、適用は特記による。
- 鉄筋の継手位置は、特記による。
- 鉄筋の重ね継手は、次による。
 - なお、径が異なる鉄筋の重ね継手の長さは、細い鉄筋の径による。
 - (ア) 柱及び梁の主筋並びに耐力壁の鉄筋の重ね継手の長さは、特記による。特記がなければ、耐力壁の鉄筋の重ね継手の長さは、40d又は表2.2の重ね継手長さのうちいずれか大きい値とする。
 - (イ) (ア)以外の鉄筋の重ね継手の長さは、表2.2による。

表2.2 鉄筋の重ね継手の長さ

鉄筋の種類	コンクリートの設計基準強度 Fc (N/mm²)	L ₁ (フックなし)	L ₁ (フックあり)
SD295A SD295B	18	45d	35d
	21	40d	30d
	24, 27	35d	25d
	30, 33, 36	35d	25d
SD345	18	50d	35d
	21	45d	30d
	24, 27	40d	30d
	30, 33, 36	35d	25d
SD390	21	50d	35d
	24, 27	45d	35d
	30, 33, 36	40d	30d

- (注) 1. L₁、L₁…重ね継手の長さ及びフックあり重ね継手の長さ
2. フックありの場合の L₁ は、図2.1に示すようにフック部分 Q を含まない。

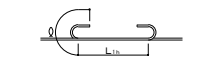


図2.1 フックありの場合の重ね継手の長さ

- 隣り合う継手の位置は、表2.3による。ただし、スラブ筋でD16以下の場合及び壁筋の場合は除く。
なお、先組み工法等で、柱及び梁の主筋のうち、隣り合う継手を同一箇所にはける場合は、特記による。

表2.3 隣り合う継手の位置

重ね継手	フックありの場合	L ₁		L ₁	
		a	0.5L ₁	a	0.5L ₁
フックなしの場合		a	0.5L ₁	a	0.5L ₁
		a	0.5L ₁	a	0.5L ₁
圧接継手・溶接継手		a	≥400mm		
機械式継手		a	≥400mm, かつ、a ≥ (d + 40) mm		

- 鉄筋の定着は、次による。

- 鉄筋の定着の長さは、特記による。特記がなければ、表2.4による。

鉄筋の種類	コンクリートの設計基準強度 Fc (N/mm²)	直線定着の長さ		フックあり定着の長さ	
		L ₁	L ₂	L ₁	L ₂
SD295A SD295B	18	45d	40d	35d	30d
	21	40d	35d	30d	25d
	24, 27	35d	30d	25d	20d
	30, 33, 36	35d	30d	25d	20d
SD345	18	50d	40d	35d	30d
	21	45d	35d	30d	25d
	24, 27	40d	35d	30d	25d
	30, 33, 36	35d	30d	25d	20d
SD390	21	50d	40d	35d	30d
	24, 27	45d	40d	35d	30d
	30, 33, 36	40d	35d	30d	25d

- (注) 1. L₁、L₁…2 から4. まで以外の直線定着の長さ及びフックありの定着の長さ
2. L₁、L₁…割製破壊のおそれのない箇所への直線定着の長さ及びフックありの定着の長さ
3. L₁…小梁及びスラブの下端筋の直線定着の長さ。ただし、基礎耐圧スラブ及びこれを受ける小梁を除く。
4. L₁…小梁の下端筋のフックありの定着の長さ
5. フックありの定着の場合は、図2.2に示すようにフック部分 Q を含まない。また、中間部での折曲げは行わない。

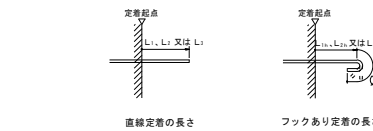


図2.2 直線定着の長さ及びフックあり定着の長さ

- 仕口内に縦に折り曲げて定着する鉄筋の定着長さ及び、表2.4のフックあり定着の長さを確保できない場合の折曲げ定着の方法は、特記による。特記がなければ、図2.3により、次の(a)から(c)までを全て満足するものとする。
 - (a) 全長は、表2.4の直線定着の長さ以上とする。
 - (b) 余長は8d以上とする。
 - (c) 仕口面から鉄筋外面までの投影定着長さ L₁ 及び L₁ は、表2.5に示す長さとする。ただし、梁主筋の柱内定着においては、柱せいの3/4倍以上とする。

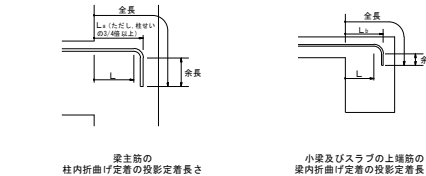


図2.3 折曲げ定着の方法

鉄筋の種類	コンクリートの設計基準強度 Fc (N/mm²)	L ₁	L ₂
SD295A SD295B	18	20d	15d
	21	15d	15d
	24, 27	15d	15d
	30, 33, 36	15d	15d
SD345	18	20d	20d
	21	20d	20d
	24, 27	20d	15d
	30, 33, 36	15d	15d
SD390	21	20d	20d
	24, 27	20d	20d
	30, 33, 36	20d	15d

- (注) 1. L₁…梁主筋の柱内折曲げ定着の投影定着長さ（基礎梁、片持梁及び片持スラブを含む。）
2. L₂…小梁及びスラブの上端筋の梁内折曲げ定着の投影定着長さ（片持小梁及び片持スラブを除く。）

- 溶接金網及びスパイラル筋の継手及び定着は、次による。
 - (ア) 溶接金網の継手及び定着は、図2.4による。
なお、L₁は表2.2に、L₁及びL₁は表2.4による。

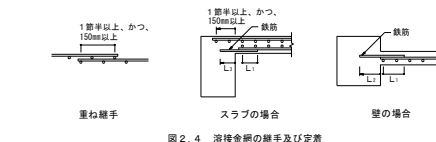


図2.4 溶接金網の継手及び定着

- スパイラル筋の継手及び定着は、図2.5による。

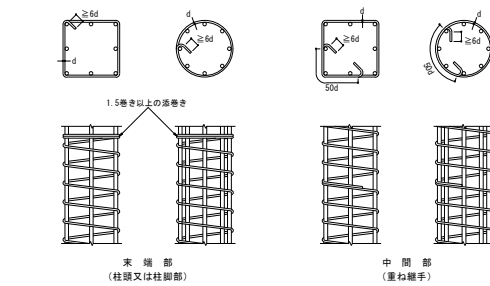


図2.5 スパイラル筋の継手及び定着

２．５ 鉄筋のかぶり厚さ及び間隔

- 鉄筋及び溶接金網の最小かぶり厚さは、特記による。特記がなければ、表2.6による。ただし、柱及び梁の主筋にD29以上を使用する場合は、主筋のかぶり厚さを径の1.5倍以上確保するように最小かぶり厚さを定める。

構造部分の種類	種	最小かぶり厚さ	
		種	最小かぶり厚さ
土に接しない部分	スラブ、耐力壁、柱、梁、耐力壁	仕上がりあり	20
		仕上がりなし	30
	層内	仕上がりあり	30
	層外	仕上がりなし	30
土に接する部分	柱、梁、耐力壁	仕上がりあり	30
		仕上がりなし	40
	基礎、補強、耐力スラブ	仕上がりあり	40
		仕上がりなし	60

- (注) 1. この表は、塩害を受けるおそれのある部分等耐久性上不利な箇所には適用しない。
2. 「仕上がりあり」とは、モルタル塗り等の仕上がりのあるものとし、鉄筋の耐久性上有効でない仕上げ（仕上塗材、塗装等）のものを除く。
3. スラブ、梁、基礎及び補強で、直接土に接する部分のかぶり厚さには、掛コンクリートの厚さを含まない。
4. 杭基礎の場合の基礎下端筋のかぶり厚さは、杭先端からとする。

- 柱、梁等の鉄筋の加工に用いるかぶり厚さは、最小かぶり厚さに10mmを加えた数値を標準とする。
- 鉄筋組立後のかぶり厚さは、最小かぶり厚さ以上とする。
- 鉄筋相互のあきは図2.6により、次の値のうち最大のもの以上とする。ただし、機械式継手及び溶接継手の場合は、特記による。
 - (ア) 継手材の最大寸法の1.25倍
 - (イ) 25mm
 - (ウ) 隣り合う鉄筋の径（1.2によるd）の平均の1.5倍

図2.6 鉄筋相互のあき

- 鉄骨鉄筋コンクリート造の場合、主筋と平行する鉄骨とのあきは、(4)による。
- 貫通孔に接する鉄筋のかぶり厚さは、最小かぶり厚さ以上とする。

２．６ 鉄筋の保護

- 鉄筋の組立後、スラブ、梁等には、歩み板を置き流す等の措置を講じ、直接鉄筋の上を歩かないようにする。
- コンクリートの打込みによる、鉄筋の乱れを可能な限り少なくするとともに、かぶり厚さ、鉄筋の位置及び間隔の保持に努める。

３．基礎及び基礎梁の配筋

３．１ 杭基礎の配筋

- 既製コンクリート杭の杭頭部の補強方法は、図3.1のA形又は図3.2のB形とし、適用は特記による。特記がなければ、B形とする。
- 中詰めコンクリートは、基礎のコンクリートと同じ割合のコンクリートを使用する。
- 既製コンクリート杭以外の場合は、特記による。



- (注) 1. 中詰めコンクリート補強筋は、次による。
杭径300φ以下 …… 4-D13
杭径350～400φ …… 6-D13
杭径450～600φ …… 8-D13
2. 中詰めコンクリート補強筋には、フックを付けない。

図3.1 杭基礎の配筋及び杭頭部の補強方法（A形）

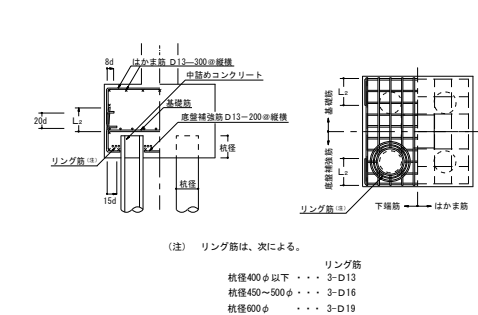


図3.2 杭基礎の配筋及び杭頭部の補強方法（B形）

３．２ 直接基礎の配筋

- 直接基礎（独立基礎）の場合の配筋は、図3.3による。

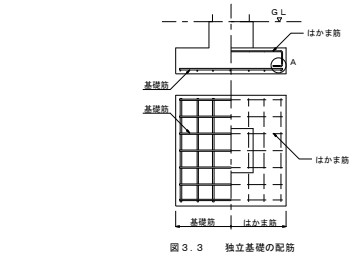


図3.3 独立基礎の配筋

- 直接基礎（連続基礎）の場合の配筋は、図3.4による。

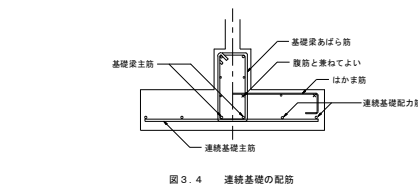


図3.4 連続基礎の配筋

３．３ 基礎梁のあばら筋

- 基礎梁のあばら筋の配筋は、図3.5による。

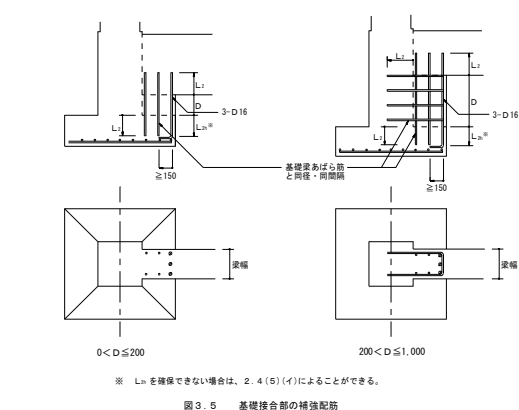


図3.5 基礎梁のあばら筋の配筋

３．４ 基礎梁主筋の継手、定着及び余長

- 一般事項
 - (ア) 梁筋は、原則として、柱をまたいで引き通すものとし、引き通すことができない場合は、柱内に定着する。ただし、やむを得ず梁内に定着する場合は、図3.6による。
 - (イ) 梁筋を柱内に定着する場合は、5.1(5)(イ)による。

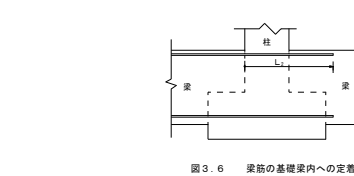


図3.6 梁筋の基礎梁内への定着

- 独立基礎で基礎梁にスラブが付かない場合の主筋の継手、定着及び余長は、図3.7による。

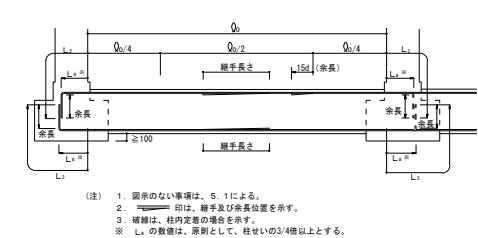


図3.7 主筋の継手、定着及び余長（その1）

- 独立基礎で基礎梁にスラブが付く場合の主筋の継手、定着及び余長は、図3.8による。ただし、耐圧スラブが付く場合は、(4)による。

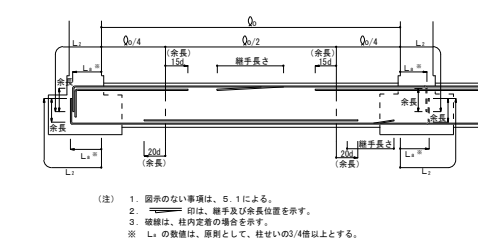


図3.8 主筋の継手、定着及び余長（その2）

- 連続基礎及びべた基礎の場合の主筋の継手、定着及び余長は、図3.9による。

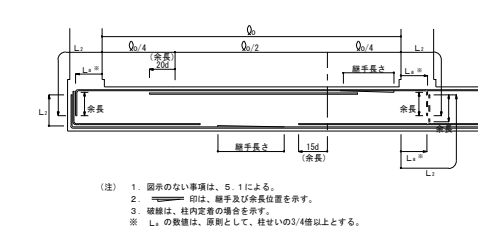


図3.9 主筋の継手、定着及び余長（その3）

３．５ 基礎梁のあばら筋

- あばら筋組立の形及びフックの位置は、5.2(1)による。ただし、梁の上下にスラブが付く場合で、かつ、差せいが1.5m以上の場合は、図3.10によることができる。

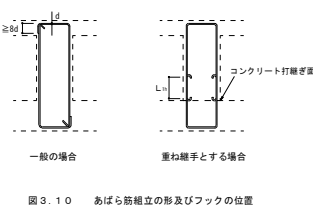


図3.10 あばら筋組立の形及びフックの位置

(有)新建築設計事務所

一級建築士 第 123921 号
黒木 博幸

【構造設計図書の作成】
（有）鎌田建築構造設計事務所
構造設計一級建築士 第 3187号
一級建築士 第89816号 鎌田 次雄

吉野東中学校校舎増築その他本体工事

鉄筋コンクリート構造配筋標準図(1)

A3: NO SCALE

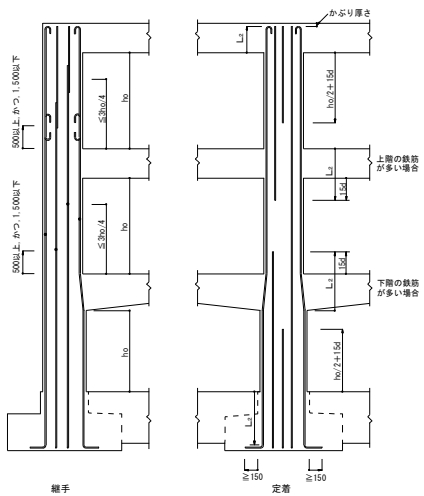
鹿児島市建設局建築部建築課

S-03

鉄筋コンクリート構造配筋標準図（２）

４．柱の配筋

４．１ 柱主筋の継手、定着及び余長

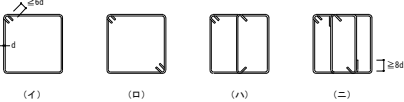


- 柱の両端にある主筋で、重ね継手の場合及び最上層の柱頭にある場合には、フックを付ける。
- 張り合う継手の位置は、表2.3による。
- 柱頭定着長さ L_d が確保できない場合は、構造計算等により必要長さの確認を行うものとする。

図4.1 柱主筋の継手、定着及び余長

４．２ 帯筋組立の形及び割付け

① H形



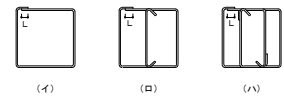
(イ)

(ロ)

(ハ)

(ニ)

② W-I形



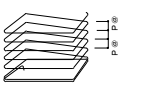
(イ)

(ロ)

(ハ)

(注) 溶接は、鉄筋の組立前に行う。

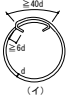
③ S P 形（スパイラル形）



(イ)

(ロ)

④ 丸形

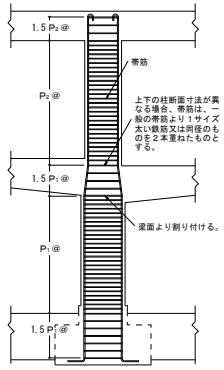


(イ)

(ロ)

- H形を標準とする。
- フック及び継手の位置は、交互とする。
- 溶接する場合の溶接長さとは、両面フラッシュ溶接の場合は 5d 以上、片面フラッシュ溶接の場合は 10d 以上とする。
- S P形において、柱頭及び基礎の溶接は 1.5 倍以上の溶接を行う。
- H形の 135° 曲げのフックが困難な場合は、W-I形とする。

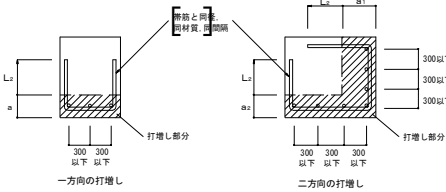
図4.2 帯筋組立の形



柱に取り付く梁に段差がある場合、帯筋の間隔を $1.5 P_1$ 又は $1.5 P_2$ 以下の範囲は、その柱に取り付くすべての梁を考慮して適用する。
なお、 P_1 、 P_2 は、特記された帯筋の間隔を示す。

図4.3 帯筋の割付け

４．３ 柱の打増し補強



- 柱の打増し幅（ a_1 、 a_2 ）が 70 mm 以上の場合の補強を示す。
- 帯筋と同一方向の補強筋は、帯筋と同径、同材質、同間隔とし定着長さは L_d とする。
- 軸方向の補強筋間隔は 300 mm 以下とする。

図4.4 柱の打増し補強配筋

５．梁の配筋

５．１ 大梁主筋の継手、定着及び余長

- 大梁主筋の継手及び定着の一般事項
- 梁主筋は、原則として、柱をまたいで引き通すものとし、引き通すことができない場合は、（イ）により柱内に定着することができる。ただし、やむを得ず梁内に定着する場合は、図5.1による。

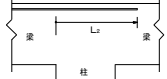


図5.1 梁主筋の梁内定着

- 梁主筋を柱内に折り曲げて定着する場合は次による。
なお、定着の方法は、2.4(5)(イ)による。

上端筋：曲げ降ろす。
下端筋：原則として曲げ上げる。

- 段違い梁は、図5.2による。

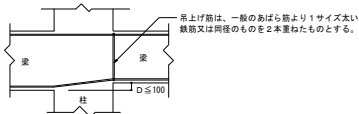
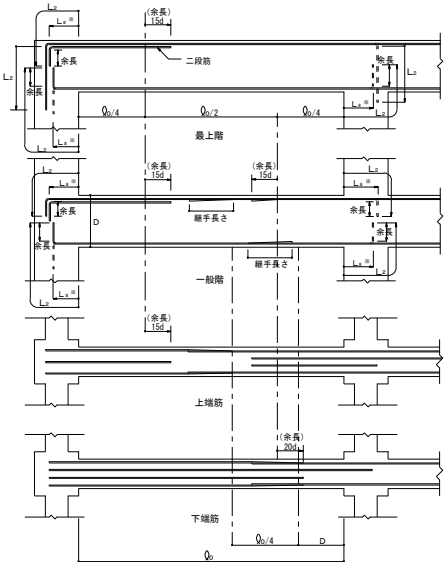


図5.2 段違い梁

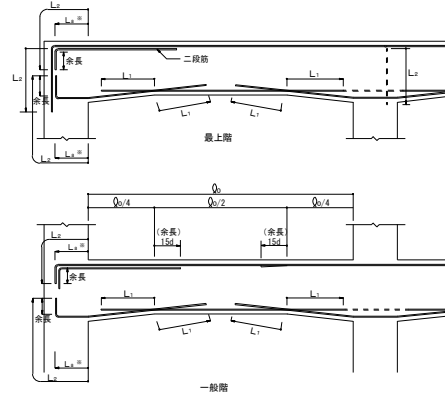
- ハンチのない場合の重ね継手、定着及び余長は、図5.3による。



- 継手中心位置は次による。
上端筋：中央 $Q_0/2$ 以内
下端筋：柱頭より変せい（D）以上とし、 $Q_0/4$ を加えた範囲以内
- 2.2(2)(イ)で定めた鉄筋には、フックを付ける。
- 印は、継手及び余長を示す。
- 継手は、柱内定着の場合を示す。
- 変下端筋を、やむを得ず下層の柱に曲げ下げる場合は、下柱に十分な量の帯筋を配するなど注意が必要である。
- L_d の数値は、原則として、柱せいDの3/4倍以上とする。

図5.3 大梁の重ね継手、定着及び余長

- ハンチのある場合の重ね継手、定着及び余長は、図5.4による。



- 2.2(2)(イ)で定めた鉄筋には、フックを付ける。
- 印は、継手及び余長を示す。
- 梁内定着の端部下端筋が接合するときは、 $x = x + x$ のように引き通すことができる。
- 継手は、柱内定着の場合を示す。
- 変下端筋を、やむを得ず下層の柱に曲げ下げる場合は、下柱に十分な量の帯筋を配するなど注意が必要である。
- L_d の数値は、原則として、柱せいDの3/4倍以上とする。

図5.4 ハンチのある大梁の定着及び余長

５．２ あばら筋（小梁、片持梁、基礎梁含む）の組立の形及び割付け等

- あばら筋組立の形及びフックの位置

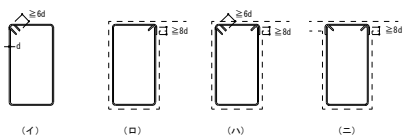
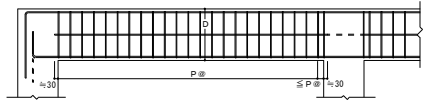


図5.5 あばら筋組立の形

- （イ）を標準とする。ただし、L形の場合は、（ロ）又は（ハ）、T形の場合は、（ロ）～（ニ）とすることができる。
- フックの位置は、（イ）の場合は交互とし、（ロ）の場合は交互とし、（ハ）の場合は交互とし、（ニ）の場合は交互とする。
- なお、（ハ）の場合は鉄筋の付く側を 90° 折曲げとする。

- あばら筋の割付け

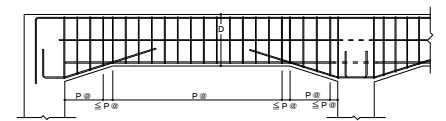
- 間隔が一律で、ハンチのない場合は、図5.6による。



- あばら筋は、柱頭的位置から割り付ける。
- 図中の P は、特記されたあばら筋の間隔を示す。

図5.6 あばら筋の割付け（その1）

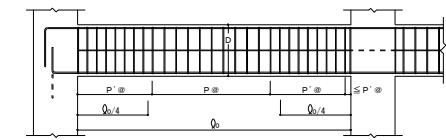
- 間隔が一律で、ハンチのある場合は、図5.7による。



- あばら筋は、柱頭的位置から割り付ける。
- 図中の P は、特記されたあばら筋の間隔を示す。

図5.7 あばら筋の割付け（その2）

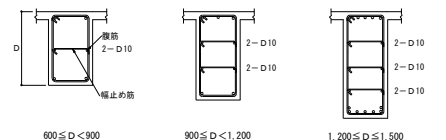
- 梁の端部で間隔の異なる場合は、図5.8による。



- あばら筋は、柱頭的位置から割り付ける。
- 図中の P は、特記されたあばら筋の間隔を示す。

図5.8 あばら筋の割付け（その3）

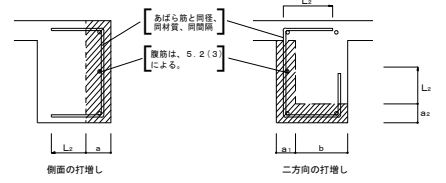
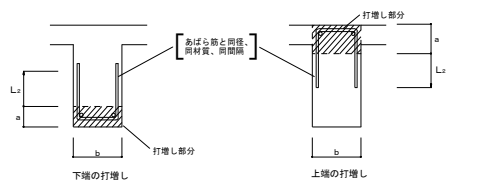
- 腹筋及び幅止め筋



- 腹筋に継手を設ける場合の継手長さは、150 mm 程度とする。
- 幅止め筋及び受け用幅止め筋は、D10～1,000 mm 程度とする。
- 腹筋を計算上考慮している場合の継手長さ及び定着長さは、特記による。

図5.9 腹筋及び幅止め筋

５．３ 梁の打増し補強

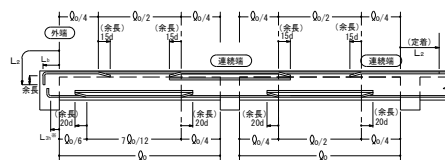


- 梁の打増し幅（ a_1 、 a_2 ）が 70 mm 以上の場合の補強を示す。
- あばら筋と同一方向の補強筋は、あばら筋と同径、同材質、同間隔とし、定着長さは L_d とする。

図5.10 梁の打増し補強配筋

５．４ 小梁主筋の継手、定着及び余長

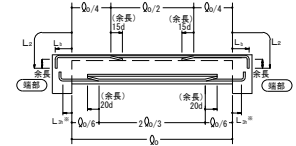
- 連続小梁の場合



- 印は、余長位置を示す。
- 変せいが小さく差置で余長がとれない場合は、斜めにしてもよい。
- 図示のない事項は、3.4及び5.1に準ずる。
- L_d を確保できない場合は、2.4(5)(イ)によることができる。

図5.11 小梁主筋の継手、定着及び余長（その1）

- 単独小梁の場合

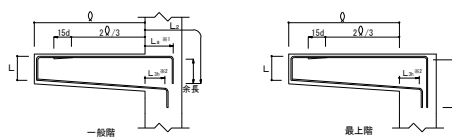


- 印は、余長位置を示す。
- 変せいが小さく差置で余長がとれない場合は、斜めにしてもよい。
- 図示のない事項は、3.4及び5.1に準ずる。
- L_d を確保できない場合は、2.4(5)(イ)によることができる。

図5.12 小梁主筋の継手、定着及び余長（その2）

５．５ 片持梁主筋の継手、定着及び余長

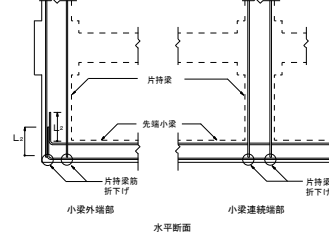
- 先端に小梁のない場合



- 印は、余長位置を示す。
- 先端の折曲げの長さは、変せいらから厚さを除いた長さとする。
- 図示のない事項は、5.1による。
- L_d の数値は、原則として、柱せいDの3/4倍以上とする。
- L_d を確保できない場合は、2.4(5)(イ)によることができる。

図5.13 片持梁主筋の定着及び余長

- 先端に小梁がある場合



- 図示のない事項は、（1）による。
- 先端の小梁端部の主筋は、片持梁内に水平定着する。
- 先端小梁の連続端は、片持梁の先端を貫通する通し筋としてよい。

図5.14 片持梁主筋の定着

鉄筋コンクリート構造配筋標準図（3）

6. 壁及びその他の配筋

6. 1 壁の配筋

(1) 壁の配筋は表 6. 1 による。

表 6. 1 壁の配筋		
種別	縦筋及び横筋	断面図 (mm)
W12	D10-200@シングル	120
W15A	D10-150@シングル	150
W15B	D10-100@シングル	150
W18A	D10-200@ダブル	180
W18B	D10-150@ダブル	180
W20A	D10-200@ダブル	200
W20B	D10-150@ダブル	200

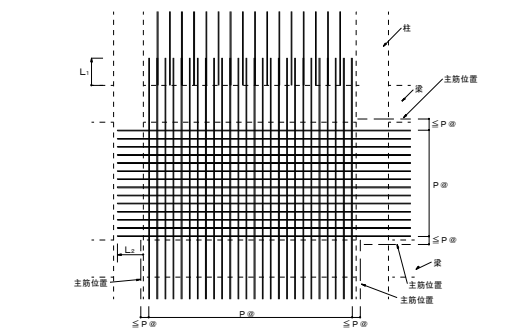
(注) 壁筋の配筋順序は、規定しない。

(2) 片持スラブ形階段を受ける壁の配筋は表 6. 2 による。

表 6. 2 片持スラブ形階段を受ける壁の配筋			
種別	縦筋及び横筋	断面図 (mm)	階段の配筋種別 (表 8. 1)
KW1	縦筋 D13-200@ダブル	180	KA1
	横筋 D10-200@ダブル		KA3
KW2	縦筋 D13-150@ダブル	200	KA2
	横筋 D10-200@ダブル		KA4

(注) 縦筋は、横筋の外側に配筋する。

6. 2 壁の継手及び定着



- 図中の P 等は、特記された壁筋の間隔を示す。
- 壁筋の重ね継手は L₁、定着長さは L₂ とする。
- 端止め筋は、階段とも D10-1,000@程度とする。
- 原則として、柱及び梁内に、壁筋の継手を設けてはいけない。

図 6. 1 壁の配筋

6. 3 壁の交差部及び端部の配筋

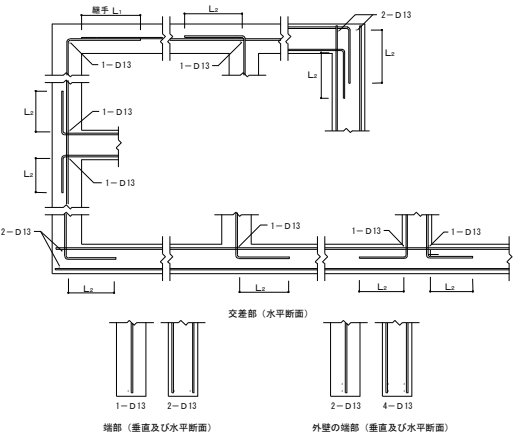


図 6. 2 壁の交差部及び端部の配筋

6. 4 壁の開口部補強

(1) 耐震壁を除く壁開口部の補強筋は、A 形は表 6. 3、B 形は表 6. 4 とする。

表 6. 3 壁開口部補強筋 (A 形)		
壁の種別	補強筋	
	縦 横	斜め
W12、W15	1-D13	1-D13
W18、W20	2-D13	2-D13

表 6. 4 壁開口部補強筋 (B 形)		
壁の種別	補強筋	
	縦 横	斜め
W12、W15	2-D13	1-D13
W18、W20	4-D13	2-D13

(2) 壁開口部補強筋の定着長さは、図 6. 3 による。

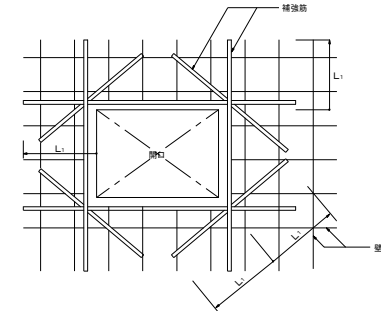
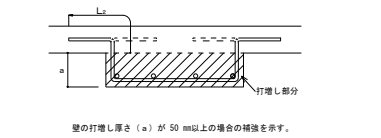


図 6. 3 壁開口部補強筋の定着長さ

(3) 開口部は柱及び梁に接する部分又は鉄筋を緩やかに曲げることにより開口部を避けて配筋できる場合は、補強を省略することができる。

6. 5 壁の打増し補強



壁の打増し厚さ (a) が 50 mm 以上の場合は補強を示す。

図 6. 4 壁の打増し補強配筋

6. 6 パラベットの配筋

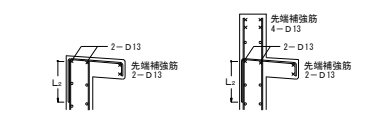


図 6. 5 パラベットの配筋

7. スラブの配筋

7. 1 スラブの配筋

表 7. 1 スラブの配筋					
配筋種別	短辺方向 (主筋) 全域	長辺方向 (配力筋) 全域	配筋種別	短辺方向 (主筋) 全域	長辺方向 (配力筋) 全域
S 1	D13-100@	D13-100@	S 8	D10、D13-150@	D10-150@
S 2	同上	D13-150@	S 9	同上	D10-200@
S 3	同上	D10、D13-150@	S10	D10、D13-200@	D10、D13-200@
S 4	D13-150@	D13-150@	S11	同上	D10-200@
S 5	同上	D10、D13-150@	S12	同上	D10-250@
S 6	同上	D10-150@	S13	D10-200@	D10-200@
S 7	D10、D13-150@	D10、D13-150@	S14	同上	D10-250@

(注) 上縁筋、下縁筋とも同一配筋とする。

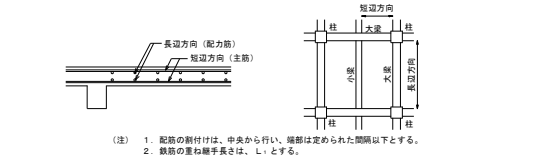


図 7. 1 スラブの配筋

7. 2 スラブ筋の定着及び受け筋

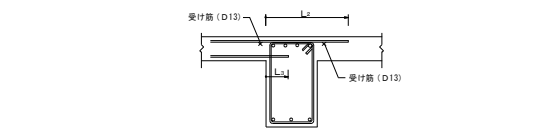


図 7. 2 スラブ筋の定着長さ及び受け筋 (その 1)

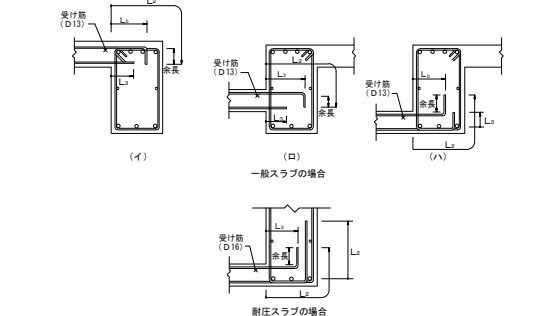


図 7. 3 スラブ筋の定着長さ及び受け筋 (その 2)

7. 3 片持スラブの配筋

表 7. 2 片持スラブの配筋			
配筋種別	主筋	配筋種別	主筋
CS1	上 D13-100@ 下 D13-200@	CS5	上 D10-200@ 下 D10-400@
CS2	上 D13-150@ 下 D13-300@	CS6	上 D10、D13-200@ 下
CS3	上 D10、D13-150@ 下 D10、D13-300@	CS7	上 D10-200@ 下
CS4	上 D10、D13-200@ 下 D10-200@		

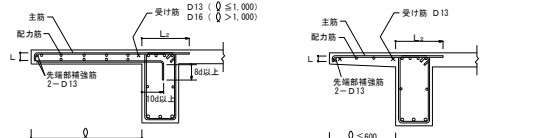


図 7. 4 片持スラブの配筋 (CS1 から CS5)

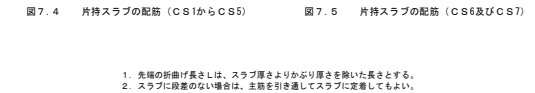


図 7. 5 片持スラブの配筋 (CS6 及び CS7)

- 先端の新断面長さ L₁は、スラブ厚さよりかなり厚さを除いた長さとする。
- スラブに段差のない場合は、主筋を引き通してスラブに定着してもよい。

7. 4 片持スラブの先端に壁が付く場合の配筋

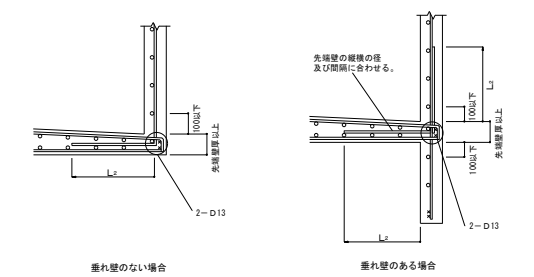


図 7. 6 先端に壁が付く場合の配筋

7. 5 スラブの開口部

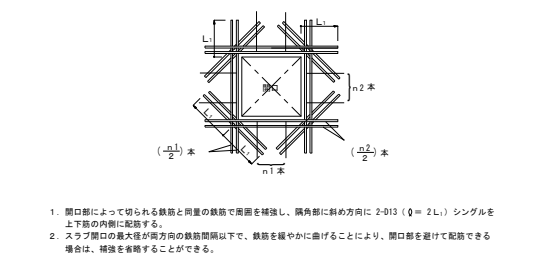


図 7. 7 スラブ開口部の補強配筋

7. 6 出隅部及び入隅部の補強

(1) 屋根スラブの出隅部及び入隅部

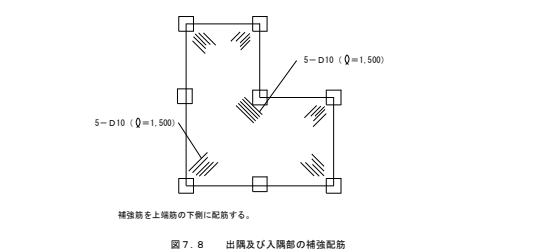


図 7. 8 出隅部及び入隅部の補強配筋

(2) 片持スラブの出隅部

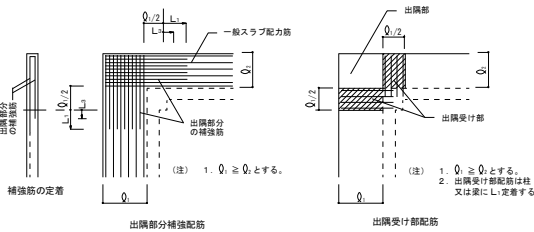


図 7. 9 片持スラブ出隅部の補強配筋

7. 7 スラブの打継ぎ補強等

(1) 土間スラブの打継ぎ補強

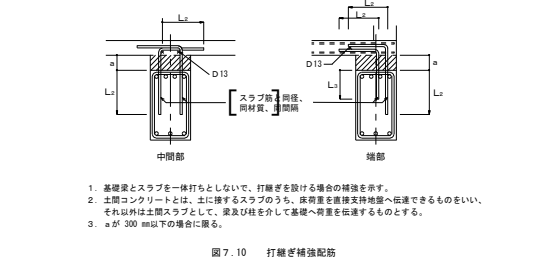


図 7. 10 打継ぎ補強配筋

(2) 土間コンクリートと基礎梁との接合部配筋

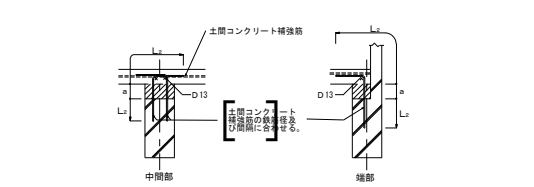


図 7. 11 土間コンクリートと基礎梁との接合部配筋

7. 8 段差のあるスラブの補強

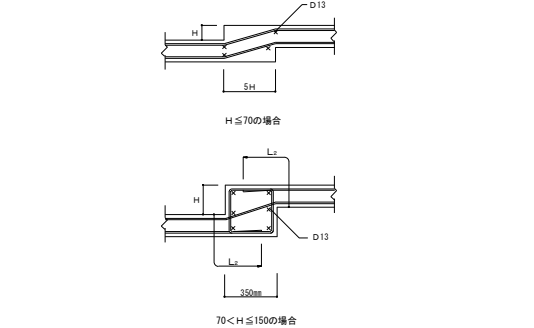


図 7. 12 段差のあるスラブの補強配筋

8. 階段の配筋

8. 1 片持スラブ形階段の配筋

表 8. 1 片持スラブ形階段の配筋		
配筋種別	KA1	KA2
配筋図		
配筋種別	KA3	KA4
配筋図		

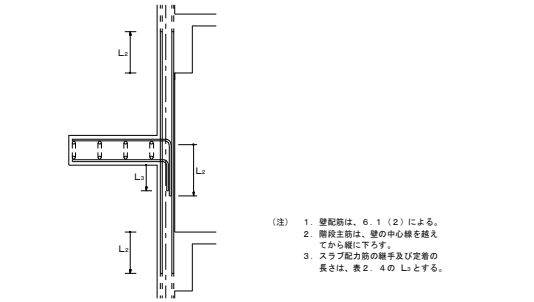


図 8. 1 片持スラブ形階段配筋の定着

- 壁配筋は、6. 1 (2) による。
- 階段主筋は、壁の中心線を超えてから下に下ろす。
- スラブ配力筋の継手及び定着の長さは、表 2. 4 の L₁ とする。

鉄筋コンクリート構造配筋標準図 (4)

8. 2 二辺固定スラブ形階段の配筋

表 8.2 二辺固定スラブ形配筋

配筋様別	上端筋、下端筋とも（全域）
K B 1	D 13—200φ
K B 2	D 13—150φ
K B 3	D 13—100φ
K B 4	D 13、D 16—150φ
K B 5	D 16—150φ
K B 6	D 16—125φ
K B 7	D 16—100φ

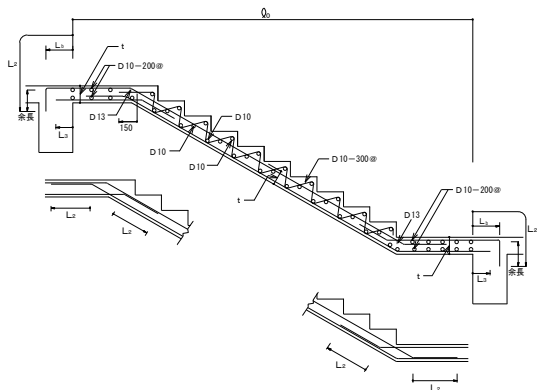
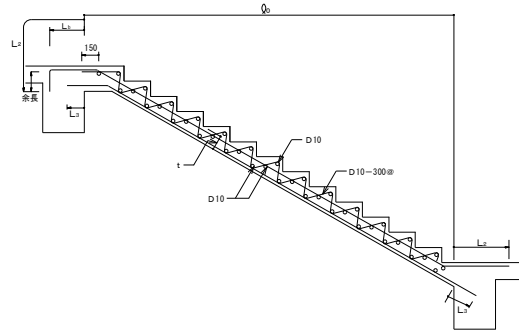


図 8.2 二辺固定スラブ形階段配筋 (その 1)



(注) 下図の場合にも二辺固定スラブ形階段配筋を準用する。

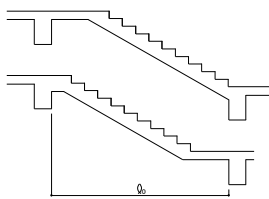


図 8.3 二辺固定スラブ形階段配筋 (その 2)

9. 梁貫通孔及びその他の配筋

9. 1 梁貫通孔の配筋

梁貫通孔の配筋は、次による。

- (1) 受貫通孔補強筋の名称等は、図 9.1 による。
- (2) 孔の径は、せいどの 1/3 以下とし、孔が円形でない場合はこれの外接円とする。
- (3) 孔の上下方向の位置はせいど中心付近とし、梁中央部以下梁下縁より D/3 (D はせいど) の範囲には設けてはならない。
- (4) 孔は、柱面から、原則として、1.5D 以上離す。ただし、基礎梁及び壁付帯梁は除く。
- (5) 孔が並列する場合の中心間隔は、孔の径の平均値の 3 倍以上とする。
- (6) 縦筋及び下り縦筋は、あばら筋の下に配筋する。
- (7) 補強筋は、主筋の内側とする。また、縦筋の定着長さは、図 9.2 による。
- (8) 孔の径がせいどの 1/10 以下、かつ、150mm 未満のもの、鉄筋を縦や斜に曲げることにより、開口部を避けて配筋できる場合は、突出は 10mm 以上とできる。
- (9) 溶接金網の束長は 1 格子以上とし、束長は 10cm 以上とする。
- (10) 溶接金網の受貫通孔部分には、鉄筋 1-13φ のリング筋を取り付けける。
なお、リング筋は、溶接金網 4 層所以下には溶接する。
- (11) 溶接金網の附け付け端は、横筋ではあばら筋の下側とし、縦筋では貫通孔の中心とする。
- (12) 貫通孔を設ける際に用いるボイド材と、その周囲の補強筋とのかぶりが不十分ないように気を付ける。

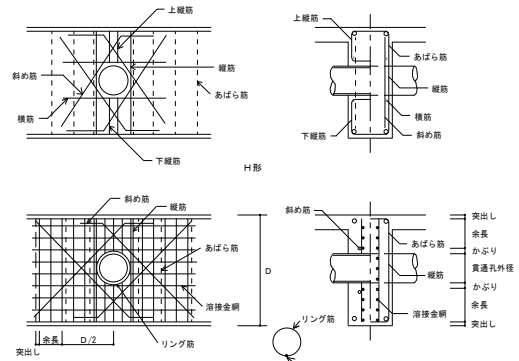


図 9.1 梁貫通孔補強筋の名称等

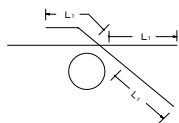


図 9.2 補強筋の定着長さ

9. 2 梁貫通孔の補強形式

表 9.1 H 形配筋

配筋 種別	斜め筋	縦筋	横筋	上下縦筋	配筋図
H1	2-2-D13	なし	なし	なし	
H2	2-2-D16	2-2-D13			
H3	4-2-D16	2-2-D13	2-2-D13	2-2-D13	
H4					
H5	4-2-D16	4-2-D13	2-2-D13	3-2-D13	
H6	4-2-D19				
H7	4-2-D22				

(注) - - - は、一般部分のあばら筋を示す。

貫通孔補強H形 ($F_c = 24 \text{ N/mm}^2$ 以下) 表中の数字に合わせた配筋種別Hを、表9.1より選択する。

[illegible]

(注) 1. ○印のものは、梁せい 100 cmの場合は補強なしとする。
2. 梁せいなどが上表の中間にある場合は、補強筋の多い方を採用する。

9. 3 コンクリートブロック帳壁との取合い

(1) 控壁の配筋

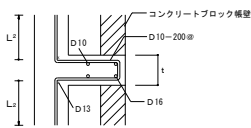


図 9.3 控壁の配筋（水平、垂直とも）

(2) 帳壁が土間コンクリート上に設置される場合の補強

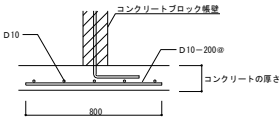


図 9.4 壁付き土間コンクリートの補強配筋

土質ボーリング柱状図（標準貫入試験）

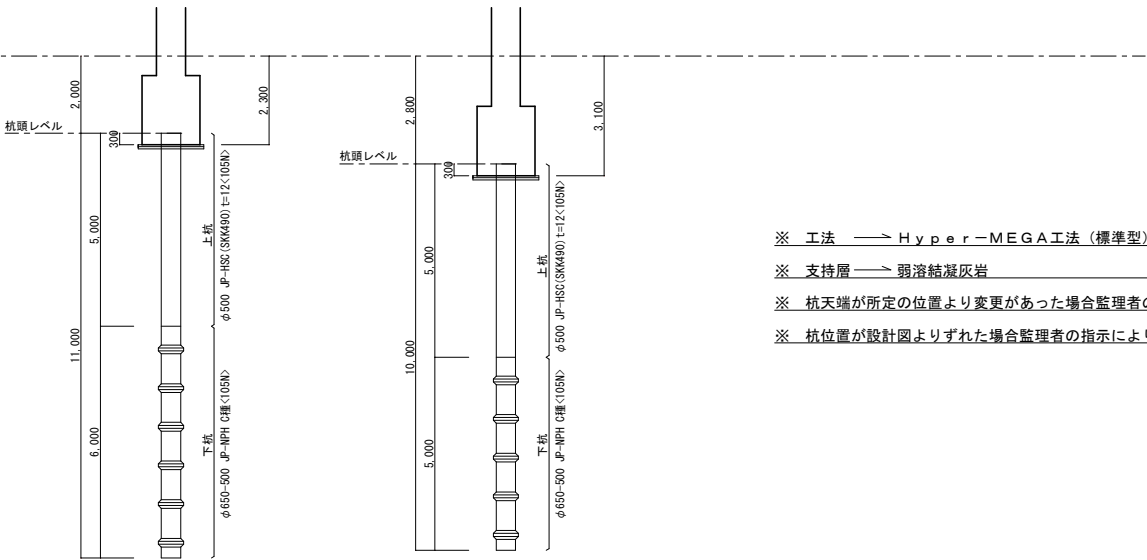
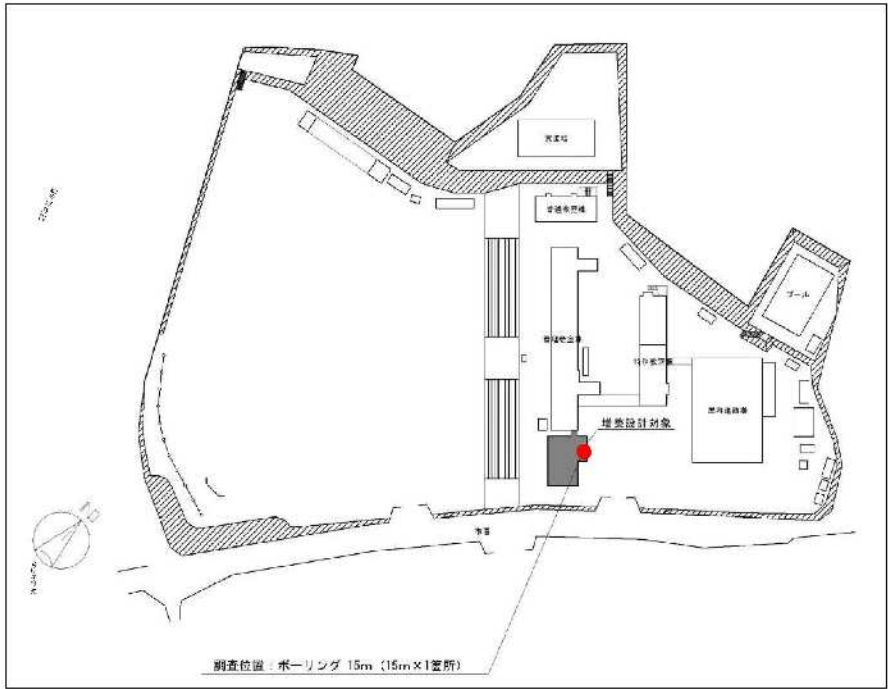
調査 名 吉野東中学校校舎増築地盤調査業務委託

事業・工事名 吉野東中学校校舎増築地盤調査業務委託

調査目的及び調査対象 建設 構造物基礎

ボーリング名 No.1		調査位置 鹿児島市吉野町5003号地		北 緯 31° 35' 55.4240"	
発注機関 鹿児島市 建築課		調査期間 令和5年2月2日～令和5年12月3日		東 経 130° 35' 07.9900"	
調査業者名 有限会社 アーステック 電話 099-244-3441		主任技師 堀川 誠 （国土院登録）	現場監督 長谷 良信 （国土院登録）	測定者 長谷 良信 （国土院登録）	ボーリング技術者 吉田 貴仁 （国土院登録）
孔口標高 下口より49m	方位 10° 北	地盤勾配 約 1% 北西	試験機 京新地下100N・M		
総削孔長 15.00m	ポンプ 使用		エンジン ヤンマー 6FD7		

標高 (m)	深さ (m)	現場土質名 (標準)	地盤材料の工程分類	色相	性状	備考	深度-N 係数	N 値 (kgf/cm ²)	100mmの打撃回数 (100mm)	打撃回数の換算係数	換算N値 (kgf/cm ²)	材料採取	試験番号	採取方法	管内	孔口
1	0.00	表土	表土	褐色	粘土	火山灰地層土質に、一部シルト質土質が混入する。粘着力が強く固い。	0	10	10	1	10					
2	0.50	砂質土	砂質土	黄褐色	砂	火山灰地層土質に、一部シルト質土質が混入する。粘着力が強く固い。	10	20	20	1	20					
3	1.00	砂質土	砂質土	黄褐色	砂	火山灰地層土質に、一部シルト質土質が混入する。粘着力が強く固い。	20	30	30	1	30					
4	1.50	砂質土	砂質土	黄褐色	砂	火山灰地層土質に、一部シルト質土質が混入する。粘着力が強く固い。	30	40	40	1	40					
5	2.00	砂質土	砂質土	黄褐色	砂	火山灰地層土質に、一部シルト質土質が混入する。粘着力が強く固い。	40	50	50	1	50					
6	2.50	砂質土	砂質土	黄褐色	砂	火山灰地層土質に、一部シルト質土質が混入する。粘着力が強く固い。	50	60	60	1	60					
7	3.00	砂質土	砂質土	黄褐色	砂	火山灰地層土質に、一部シルト質土質が混入する。粘着力が強く固い。	60	70	70	1	70					
8	3.50	砂質土	砂質土	黄褐色	砂	火山灰地層土質に、一部シルト質土質が混入する。粘着力が強く固い。	70	80	80	1	80					
9	4.00	砂質土	砂質土	黄褐色	砂	火山灰地層土質に、一部シルト質土質が混入する。粘着力が強く固い。	80	90	90	1	90					
10	4.50	砂質土	砂質土	黄褐色	砂	火山灰地層土質に、一部シルト質土質が混入する。粘着力が強く固い。	90	100	100	1	100					
11	5.00	砂質土	砂質土	黄褐色	砂	火山灰地層土質に、一部シルト質土質が混入する。粘着力が強く固い。	100	110	110	1	110					
12	5.50	砂質土	砂質土	黄褐色	砂	火山灰地層土質に、一部シルト質土質が混入する。粘着力が強く固い。	110	120	120	1	120					
13	6.00	砂質土	砂質土	黄褐色	砂	火山灰地層土質に、一部シルト質土質が混入する。粘着力が強く固い。	120	130	130	1	130					
14	6.50	砂質土	砂質土	黄褐色	砂	火山灰地層土質に、一部シルト質土質が混入する。粘着力が強く固い。	130	140	140	1	140					
15	7.00	砂質土	砂質土	黄褐色	砂	火山灰地層土質に、一部シルト質土質が混入する。粘着力が強く固い。	140	150	150	1	150					
16	7.50	砂質土	砂質土	黄褐色	砂	火山灰地層土質に、一部シルト質土質が混入する。粘着力が強く固い。	150	160	160	1	160					
17	8.00	砂質土	砂質土	黄褐色	砂	火山灰地層土質に、一部シルト質土質が混入する。粘着力が強く固い。	160	170	170	1	170					
18	8.50	砂質土	砂質土	黄褐色	砂	火山灰地層土質に、一部シルト質土質が混入する。粘着力が強く固い。	170	180	180	1	180					
19	9.00	砂質土	砂質土	黄褐色	砂	火山灰地層土質に、一部シルト質土質が混入する。粘着力が強く固い。	180	190	190	1	190					
20	9.50	砂質土	砂質土	黄褐色	砂	火山灰地層土質に、一部シルト質土質が混入する。粘着力が強く固い。	190	200	200	1	200					



- ※ 工法 → Hyper-MEGA工法（標準型）
- ※ 支持層 → 弱溶結凝灰岩
- ※ 杭天端が所定の位置より変更があった場合監督者の指示による
- ※ 杭位置が設計図よりずれた場合監督者の指示により関係事項のチェックを行う

【構造設計図書の作成】
（有）鎌田建築構造設計事務所
構造設計一級建築士 第 3187号
一級建築士 第89816号 鎌田 次雄

（有）新建築設計事務所
一級建築士 第 123921 号
黒木 博幸

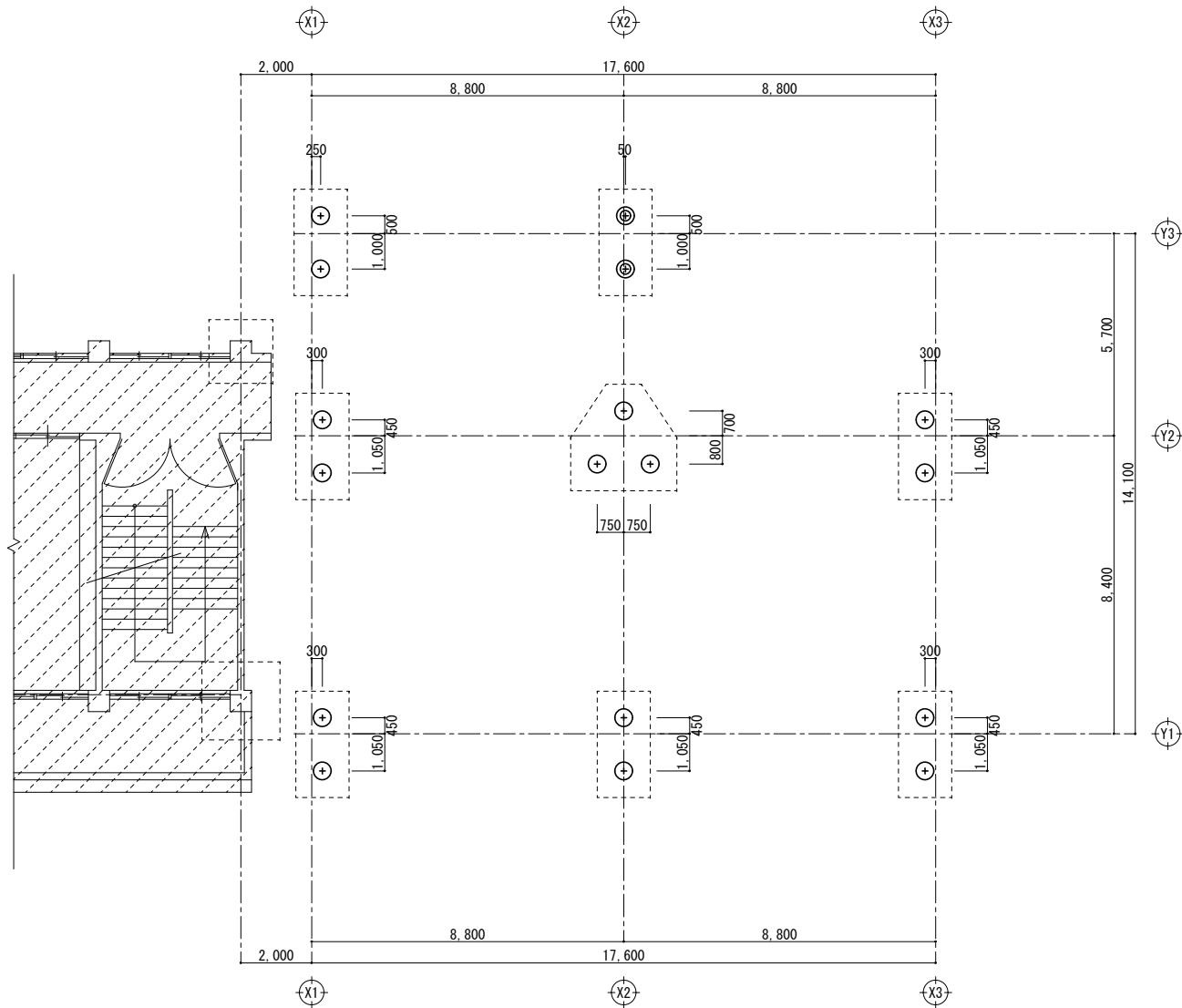
吉野東中学校校舎増築その他本体工事

ボーリング柱状図

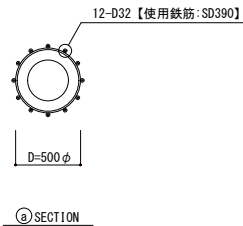
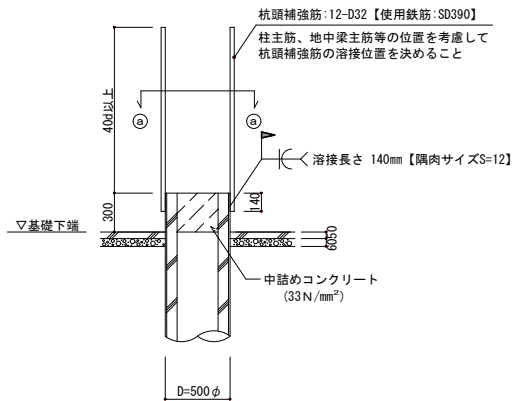
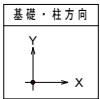
A3: NO SCALE

鹿児島市建設局建築部建築課

S-07



杭伏図 A3 S=1:200



杭施工について

- ・杭の支持確認方法として、試験杭で採取した土質資料と土質調査時の標本との照合を行うこと
- ・杭の施工により汚泥が発生した場合は、監督員と協議のうえ適正に処分することとし、設計変更の対象とする。
- ・杭の施工完了後、下記内容を明記した施工報告書を監督員に提出すること
- ①杭伏図・杭番号
- ②杭の施工日
- ③杭種、杭径、杭長
- ④杭施工記録（掘削深さ、継手、高止まり量、貫入量、セメントミルク量、施工時間、電流値、杭頭処理等）
- ⑤杭心ずれ測定記録
- ⑥杭傾斜測定記録
- ⑦セメントミルク管理試験結果

杭リスト

工法：Hyper-MEGA工法（標準型）（大臣認定工法） 拡大掘削径：700mm 拡大比 $\omega=1.00$

杭符号	上杭	下杭	杭長	杭許容支持力(長期) (kN/本)	杭本数
⊕(P1)	φ500 J P-HSC(SKK490) t=12 L=5m<10.5N>	φ650-500 J P-NPH C種<10.5N> L=6m	11m	2000	15本
⊗(P2)	φ500 J P-HSC(SKK490) t=12 L=5m<10.5N>	φ650-500 J P-NPH C種<10.5N> L=5m	10m	2000	2本

※施工精度に十分配慮すること（杭芯位置が設計図よりずれた場合監督者の指示により関係事項のチェックを行う）

【構造設計図書の作成】
㈱鎌田建築構造設計事務所
構造設計一級建築士 第 3187号
一級建築士 第89816号 鎌田 次雄

(有)新建築設計事務所

一級建築士 第 123921 号
黒木 博幸

吉野東中学校校舎増築その他本体工事

杭伏図

A3.1/200

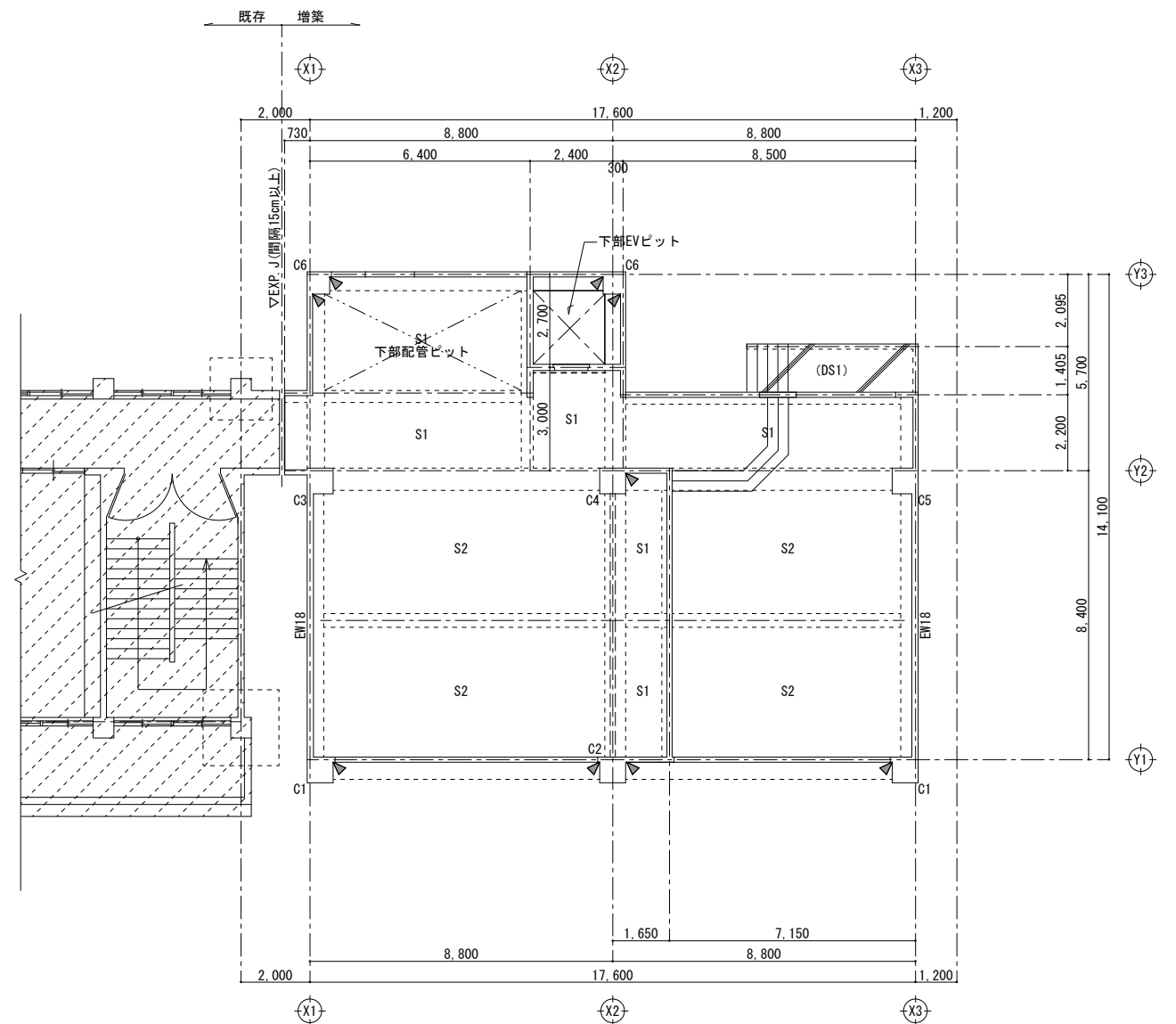
鹿児島市建設局建築部建築課

S-08






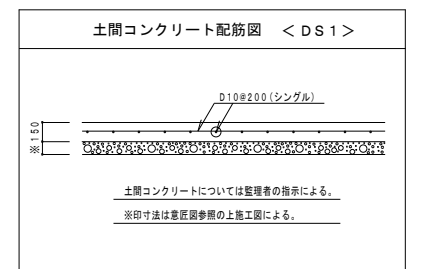
(特記事項)

1. 基礎底は、設計GL-2300とする。
2. 基礎壁・基礎小梁天端は、設計GL-100とする。
3. < >内は設計GLからの基礎レベルを示す。
4. 梁貫通孔の上下方向の位置は梁の中心付近とし、梁の上下端よりD/3(Dは梁せい)の範囲には設けないものとする。
5. 梁貫通孔は、原則として柱面より1.5D以上離す。ただし、基礎梁及び壁貫通梁は、また、柱面より1.5D以上離さない箇所は、柱面より1.0D以上の評定を得た壁を使用する。

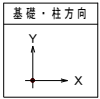
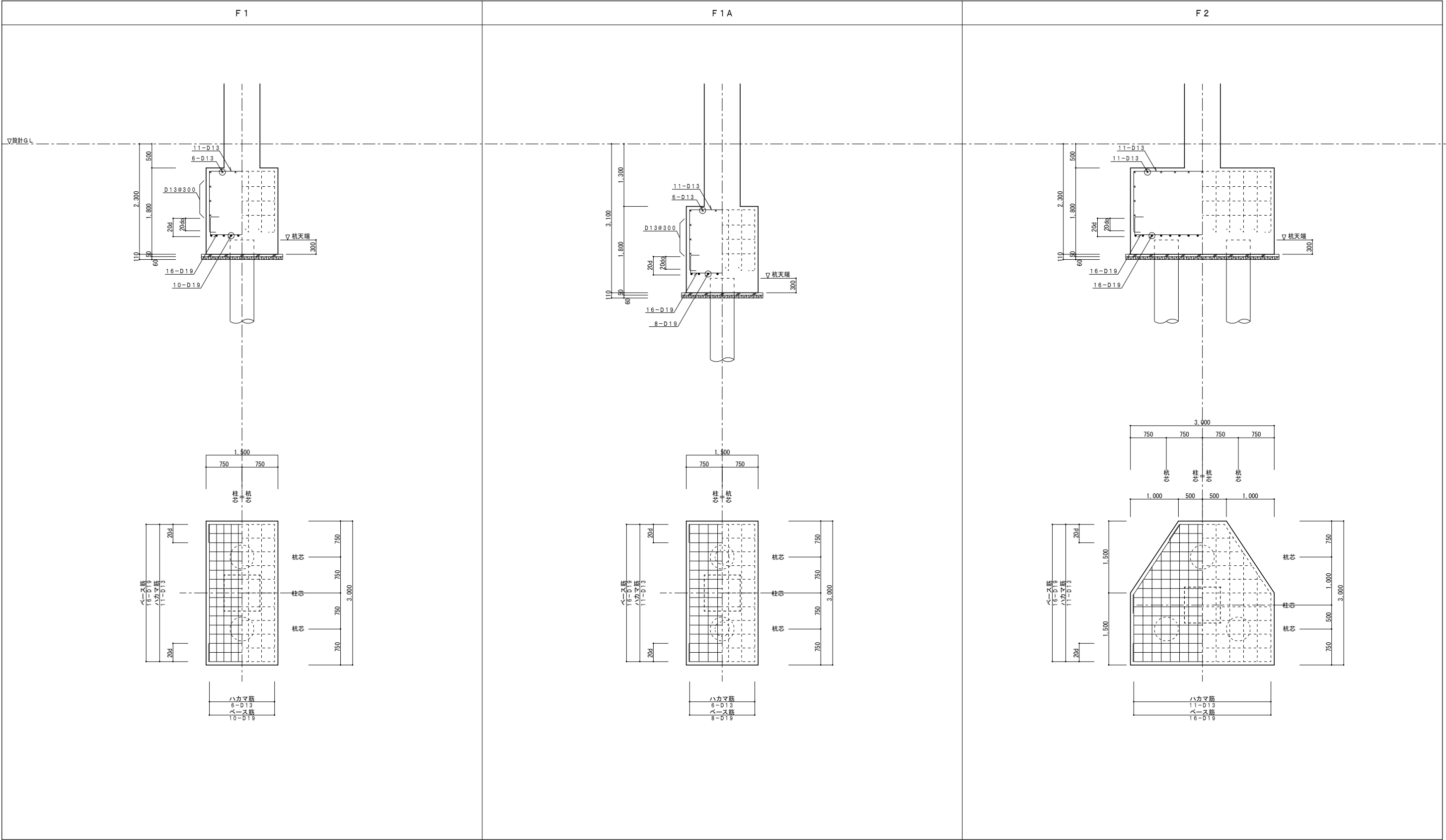


(特記事項)

1. 特記なき壁符号は、W15とする。
2. EWは耐震壁を示す。
3. 印は、鉛直方向の構造スリット(完全スリット)位置を示す。
特記以外は、軸組図参照とする。
4. 印は、地下ビット範囲を示す。
5. 印は、土間コンクリート(DS1)を示す。



【構造設計図書の作成】
 (有)鎌田建築構造設計事務所
 構造設計一級建築士 第 3187号
 一級建築士 第89816号 鎌田 次雄



【構造設計図書の作成】
(有)鎌田建築構造設計事務所
構造設計一級建築士 第 3187号
一級建築士 第89816号 鎌田 次雄

(有)新建築設計事務所
一級建築士 第 123921 号
黒木 博幸

吉野東中学校校舎増築その他本体工事

基礎リスト

A3:1/80

鹿児島市建設局建築部建築課

S-10

符 号	FG1	FG2	FG3	FG4	FG5	FG5A	FG6	FG7
位 置	全断面	全断面	全断面	全断面	全断面	全断面	全断面	全断面
B × D	650 × 1500	650 × 1600	650 × 1600	550 × 1500	500 × 1200	500 × 1200	600 × 1200	600 × 1200
▽設計GL								
断 面								
上端筋	11-D25	14-D25	13-D25	11-D25	5-D25	9-D25	11-D25	11-D25
下端筋	10-D25	13-D25	11-D25	9-D25	5-D25	8-D25	8-D25	10-D25
あばら筋	□-D13@150	□-D13@100	□-D13@150	□-D13@150	□-D13@200	□-D13@150	□-D13@200	□-D13@100
腹 筋	6-D13	6-D13	6-D13	6-D13	4-D13	4-D13	4-D13	4-D13

符 号	FB1			FB2			FB3	
位 置	X1通り	中 央	X2通り	X2通り	中 央	X3通り	両 端	中 央
B × D	400 × 1000			400 × 1000			350 × 1000	
▽設計GL								
断 面								
上端筋	4-D22	4-D22	8-D22	8-D22	4-D22	4-D22	3-D22	3-D22
下端筋	4-D22	5-D22	5-D22	5-D22	5-D22	4-D22	3-D22	5-D22
あばら筋	□-D10@150			□-D10@150			□-D10@150	
腹 筋	2-D10			2-D10			2-D10	

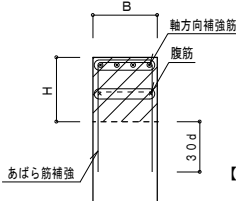
符 号	FB4	FB5	FB6	FB7	FG1	FG2
位 置	全断面	全断面	全断面	全断面	全断面	全断面
B × D	300 × 1200	300 × 1200	300 × 1200	300 × 600	500 × 1200	300 × 700
▽設計GL						
断 面						
上端筋	3-D19	3-D19	3-D19	3-D19	5-D25	3-D19
下端筋	3-D19	4-D19	3-D19	3-D19	5-D25	3-D19
あばら筋	□-D10@200	□-D10@200	□-D10@200	□-D10@200	□-D13@200	□-D10@200
腹 筋	4-D10	4-D10	4-D10	2-D10	4-D13	2-D10

○ 巾止め筋はD10@1000以下とする。
○ 梁二段筋のあきは1.5d(d：鉄筋径)とする。

基礎梁上端フカン部補強要領

※ 下記リストの本数によらない場合は、増打ち断面の0.8%以上かつD16以上、鉄筋間隔200mm以下で別途算出し、監理者の承認を得ること

梁幅：B	増打ち：H	軸方向補強筋	腹筋	あばら筋補強
B=300・350	H=370	3-D19	2-D13	あばら筋と同径 同ピッチ
B=400		4-D19		
B=500～600		4-D22		
B=650		5-D22		
B=300		3-D22		
B=350	H=870	4-D22	4-D19	
B=400		5-D22		
B=500		4-D25	4-D22	
B=650		6-D25		



【構造設計図書の作成】
㈱鎌田建築構造設計事務所
構造設計一級建築士 第 3187号
一級建築士 第89816号 鎌田 次雄

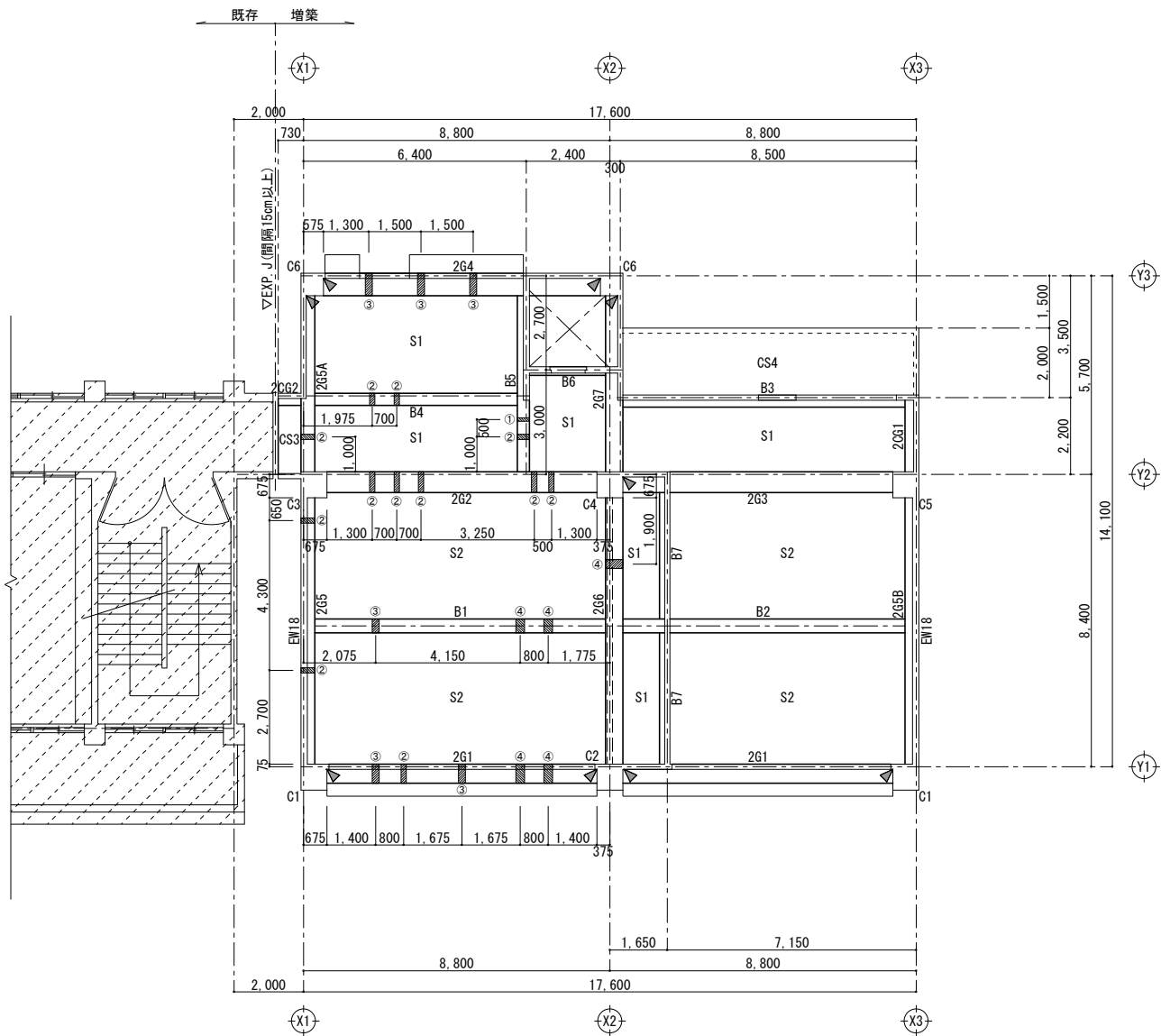
㈱新建築設計事務所
一級建築士 第 123921 号
黒木 博幸

吉野東中学校校舎増築その他本体工事

基礎梁リスト

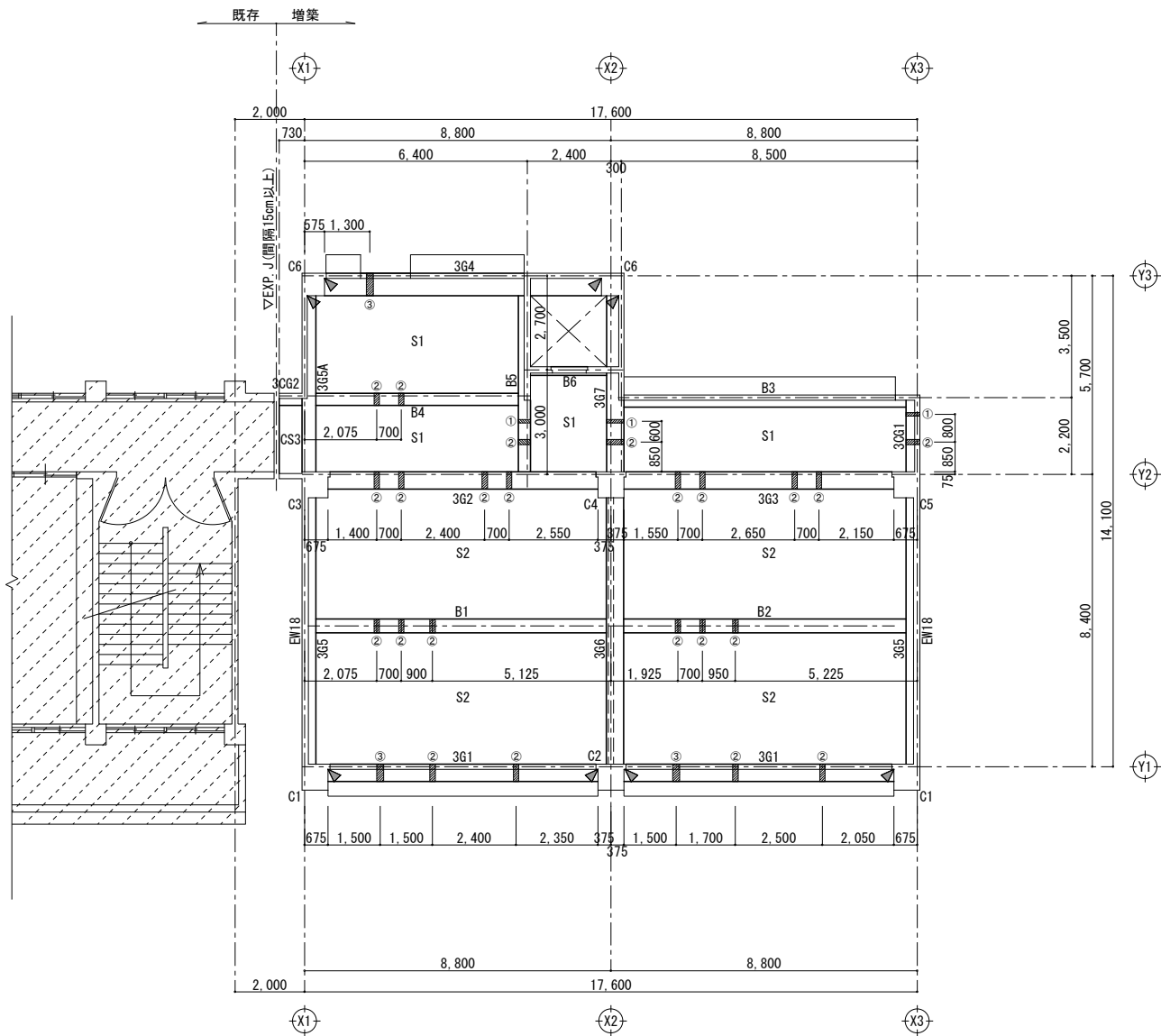
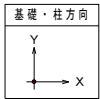
A3:1/60

鹿児島市建設局建築部建築課



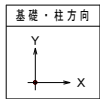
2階梁スリーブ補強		
記 号	径(φ)	箇所
①	100	1
②	150	12
③	200	6
④	250	5

1階柱壁 2階梁床伏図		A3 S=1:200
・見上げ図とする		
(特記事項)		
1. 特記なき壁符号は、W15とする。		
2. EWは斜置壁を示す。		
3. ▽印は、鉛直方向の構造スリット(完全スリット)位置を示す。特記以外は、軸組図参照とする。		
4. 梁貫通孔の上下方向の位置は梁せい中心付近とし、梁の上下端よりD/3(Dは梁せい)の範囲には設けないものとする。		
5. 梁貫通孔は、原則として柱面より1.5D以上離す。ただし、壁付帯梁は除く。また、柱面より1.5D以上離せない箇所は、柱面より1.0D以上の評定を取得した既成品を使用する。		



3階梁スリーブ補強		
記 号	径(φ)	箇所
①	100	3
②	150	23
③	200	3
④	250	—

2階柱壁 3階梁床伏図		A3 S=1:200
・見上げ図とする		
(特記事項)		
1. 特記なき壁符号は、W15とする。		
2. EWは斜置壁を示す。		
3. ▽印は、鉛直方向の構造スリット(完全スリット)位置を示す。特記以外は、軸組図参照とする。		
4. 梁貫通孔の上下方向の位置は梁せい中心付近とし、梁の上下端よりD/3(Dは梁せい)の範囲には設けないものとする。		
5. 梁貫通孔は、原則として柱面より1.5D以上離す。ただし、壁付帯梁は除く。また、柱面より1.5D以上離せない箇所は、柱面より1.0D以上の評定を取得した既成品を使用する。		



【構造設計図書の作成】
(有)鎌田建築構造設計事務所
構造設計一級建築士 第 3187号
一級建築士 第89816号 鎌田 次雄

(有)新建築設計事務所
一級建築士 第 123921 号
黒木 博幸

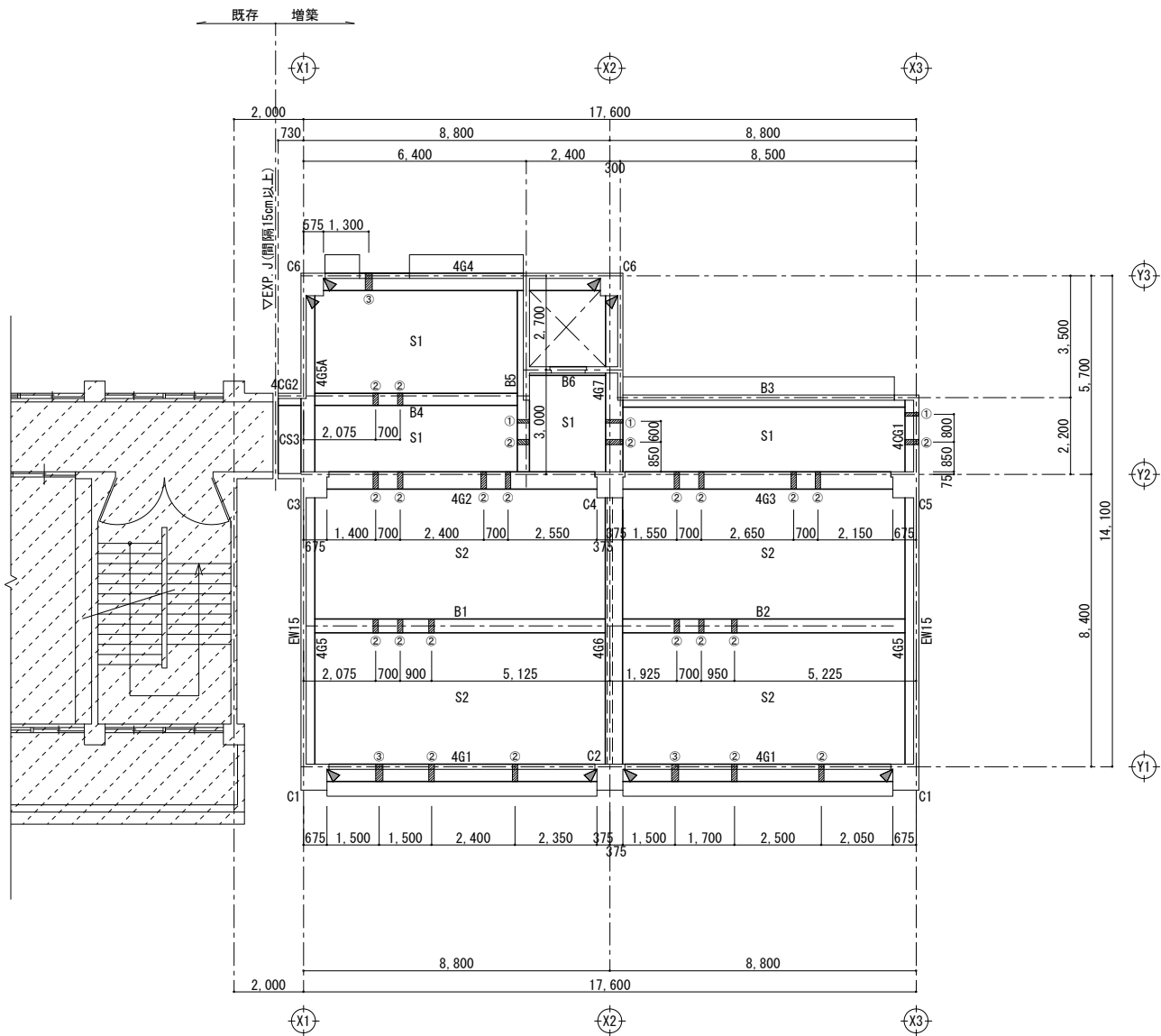
吉野東中学校校舎増築その他本体工事

各階伏図(1)

A3:1/200

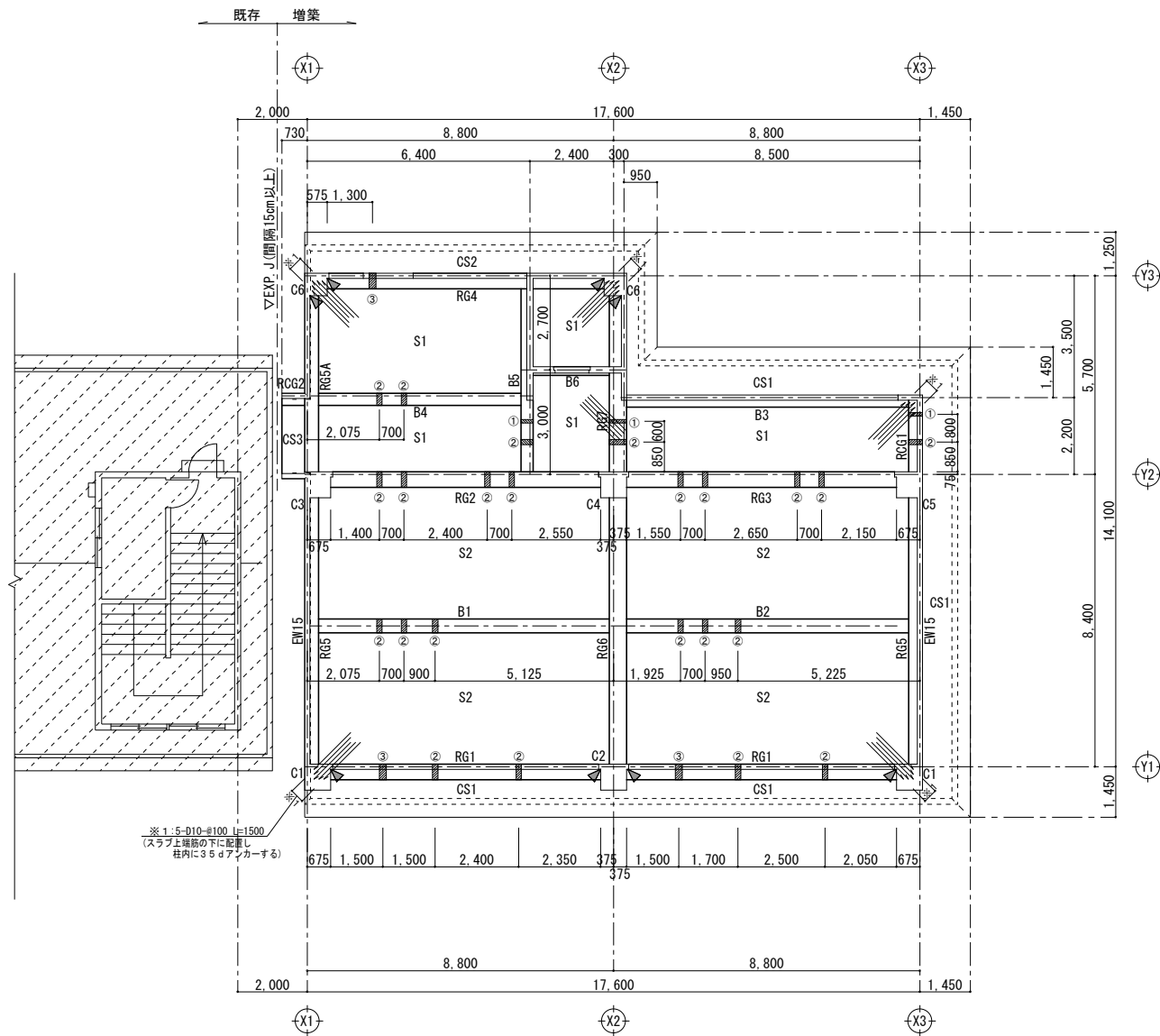
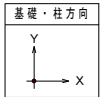
鹿児島市建設局建築部建築課

S-12



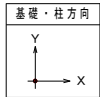
4階梁スリーブ補強		
記 号	径 (φ)	箇所
①	100	3
②	150	23
③	200	3
④	250	—

3階柱壁 4階梁床伏図 A3 S=1:200		
・見上げ図とする		
(特記事項)		
1. 特記なき壁符号は、W15とする。		
2. EWは割置壁を示す。		
3. ▽印は、鉛直方向の構造スリット(完全スリット)位置を示す。特記以外は、軸組図参照とする。		
4. 梁貫通孔の上下方向の位置は梁せい中心付近とし、梁の上下端よりD/3(Dは梁せい)の範囲には設けないものとする。		
5. 梁貫通孔は、原則として柱面より1.5D以上離す。ただし、壁付帯梁は除く。また、柱面より1.5D以上離せない箇所は、柱面より1.0D以上の評定を取得した既成品を使用する。		



R階梁スリーブ補強		
記 号	径 (φ)	箇所
①	100	3
②	150	23
③	200	3
④	250	—

4階柱壁 R階梁床伏図 A3 S=1:200		
・見上げ図とする		
(特記事項)		
1. 特記なき壁符号は、W15とする。		
2. EWは割置壁を示す。		
3. ▽印は、鉛直方向の構造スリット(完全スリット)位置を示す。特記以外は、軸組図参照とする。		
4. 梁貫通孔の上下方向の位置は梁せい中心付近とし、梁の上下端よりD/3(Dは梁せい)の範囲には設けないものとする。		
5. 梁貫通孔は、原則として柱面より1.5D以上離す。ただし、壁付帯梁は除く。また、柱面より1.5D以上離せない箇所は、柱面より1.0D以上の評定を取得した既成品を使用する。		



【構造設計図書の作成】
㈱鎌田建築構造設計事務所
構造設計一級建築士 第 3187号
一級建築士 第89816号 鎌田 次雄

㈱新建築設計事務所
一級建築士 第 123921 号
黒木 博幸

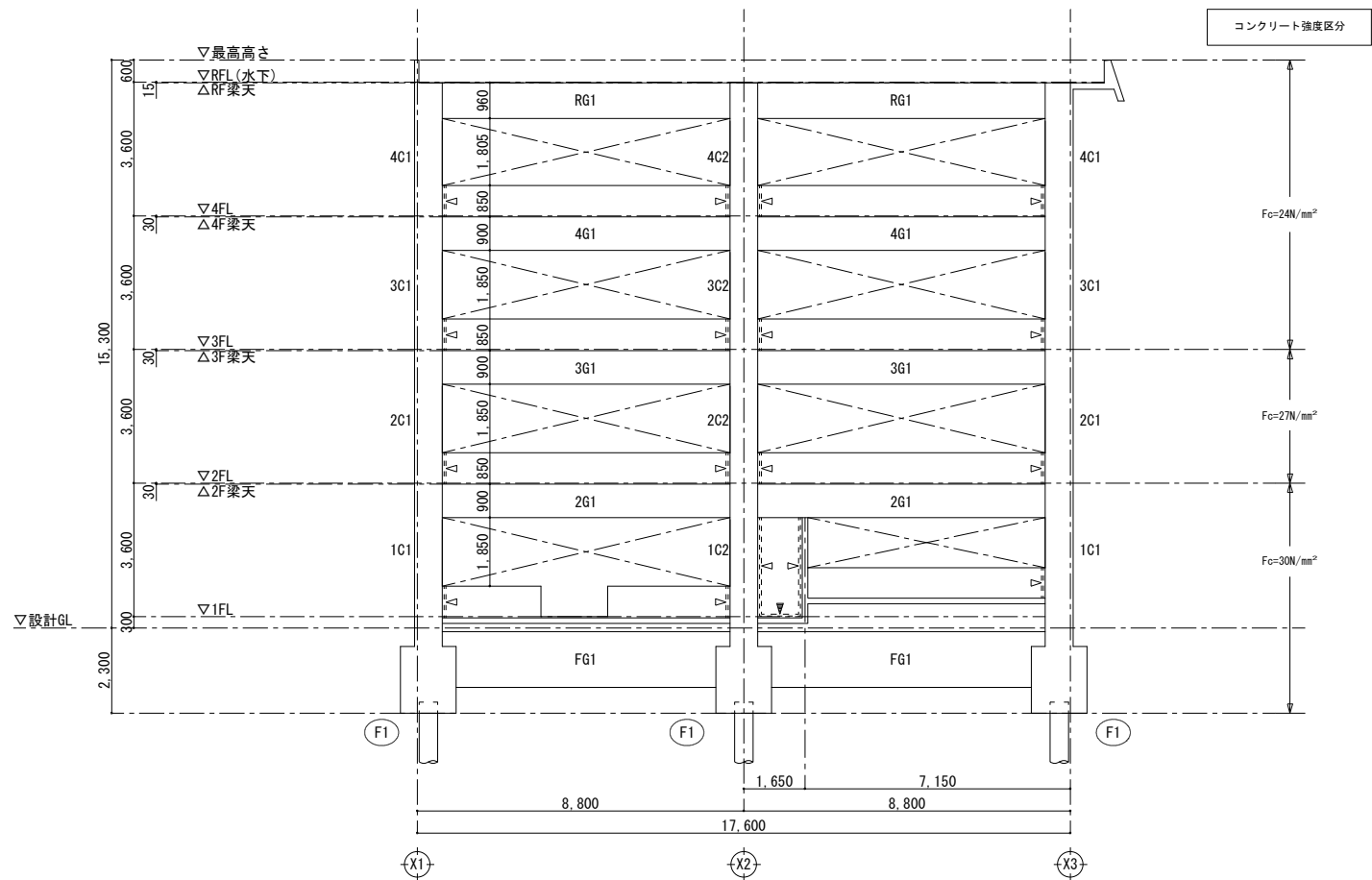
吉野東中学校校舎増築その他本体工事

各階伏図(2)

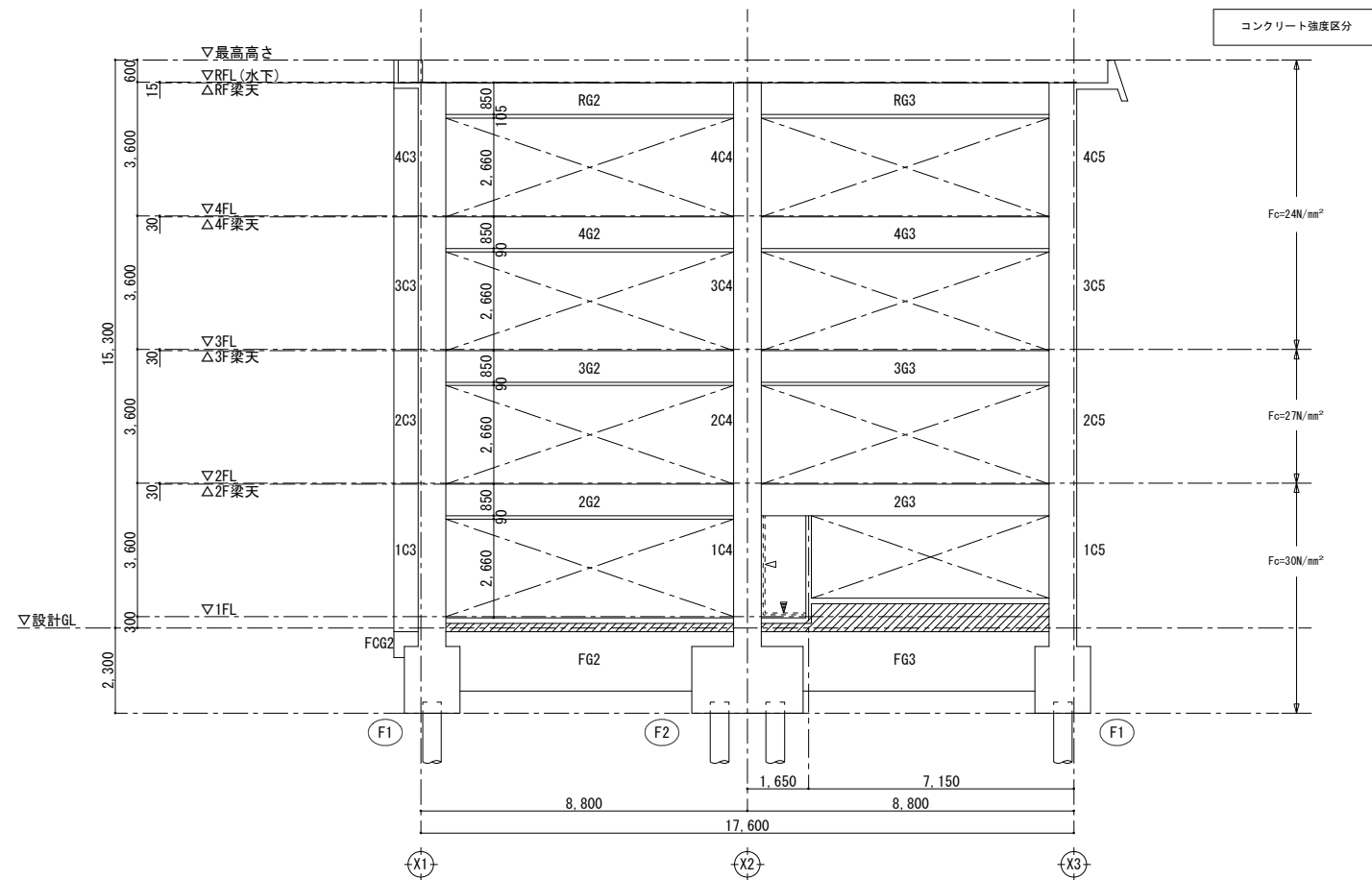
A3:1/200

鹿児島市建設局建築部建築課

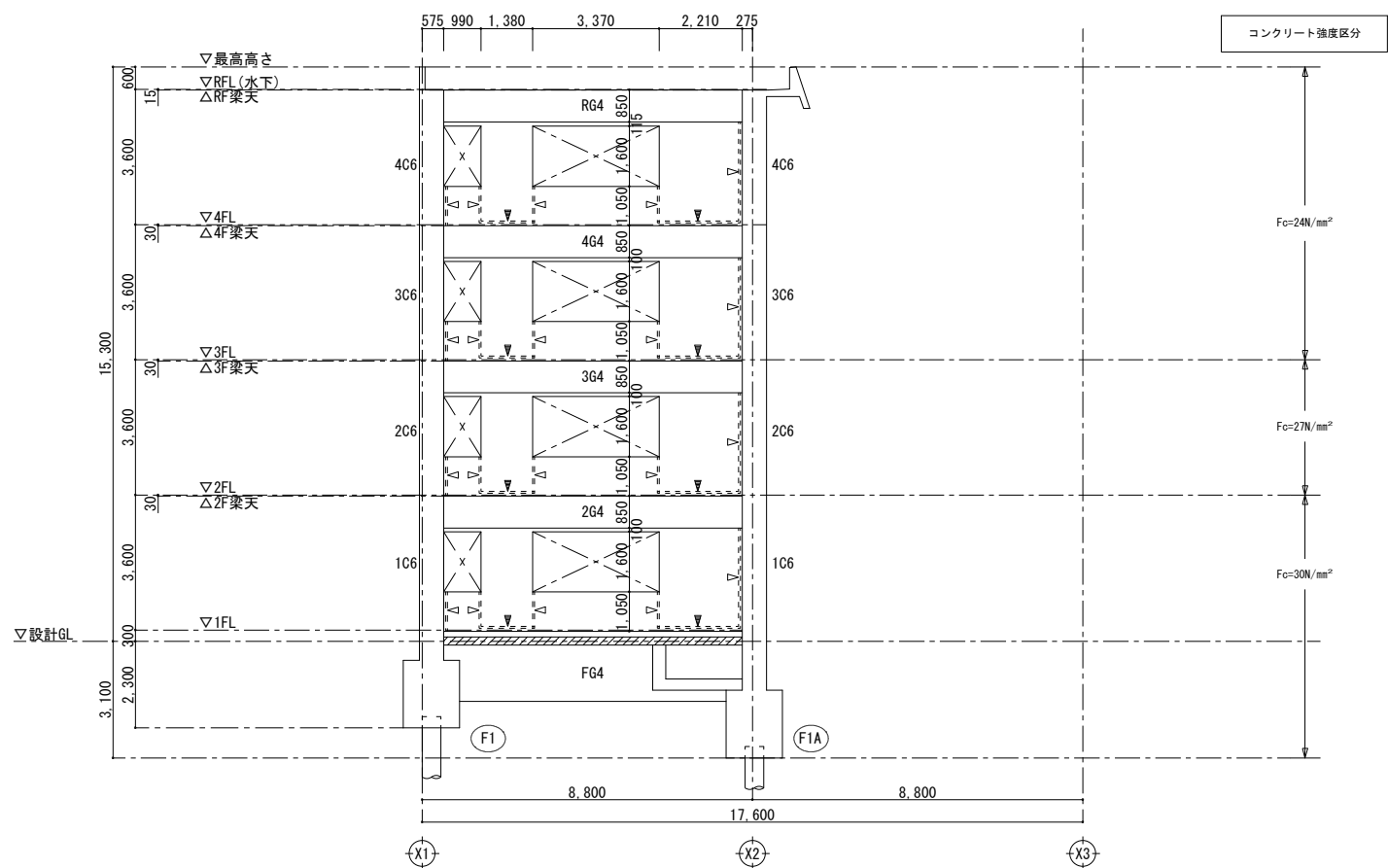
S-13



Y1通り軸組図 A3 S=1:200



Y2通り軸組図 A3 S=1:200

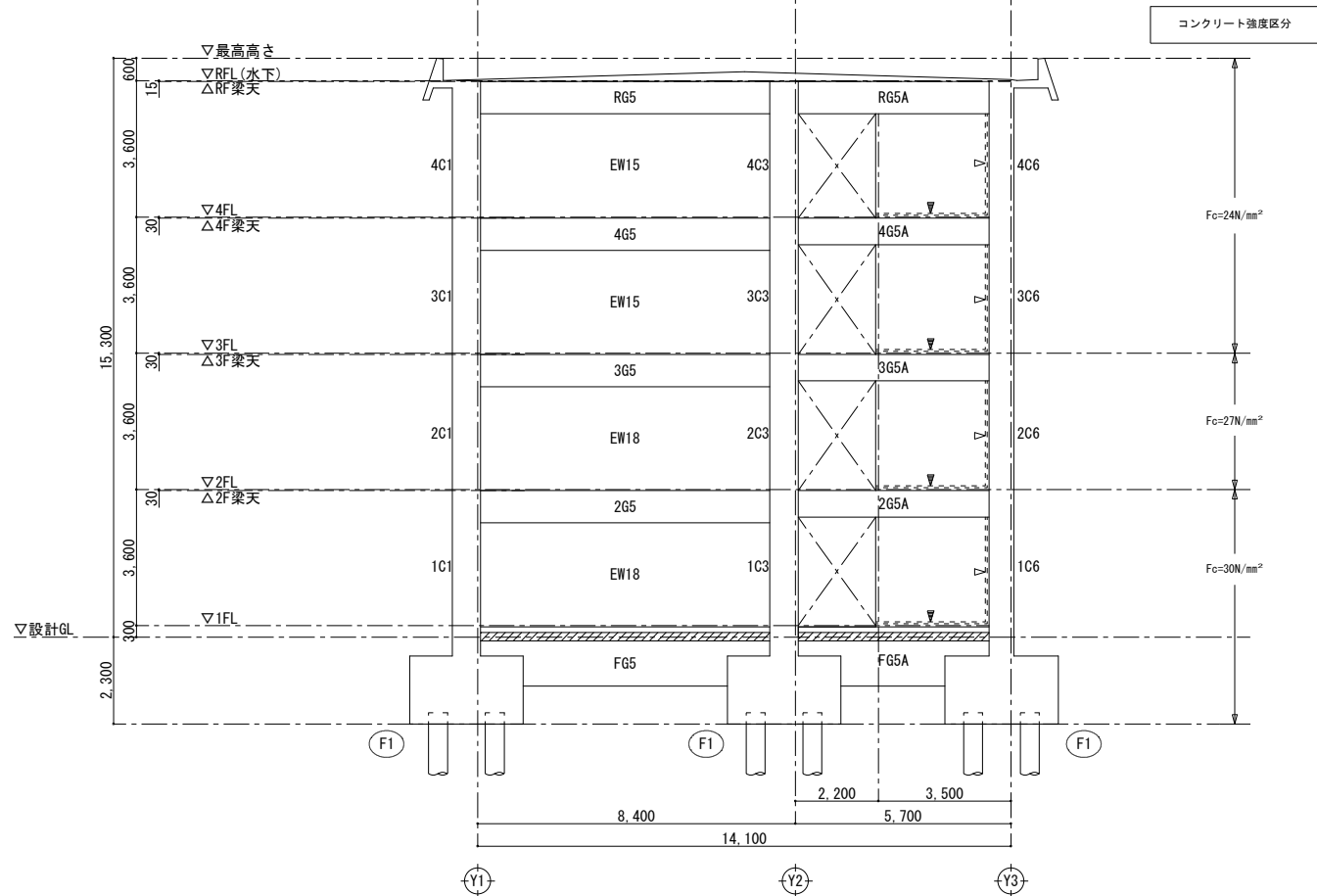


Y3通り軸組図 A3 S=1:200

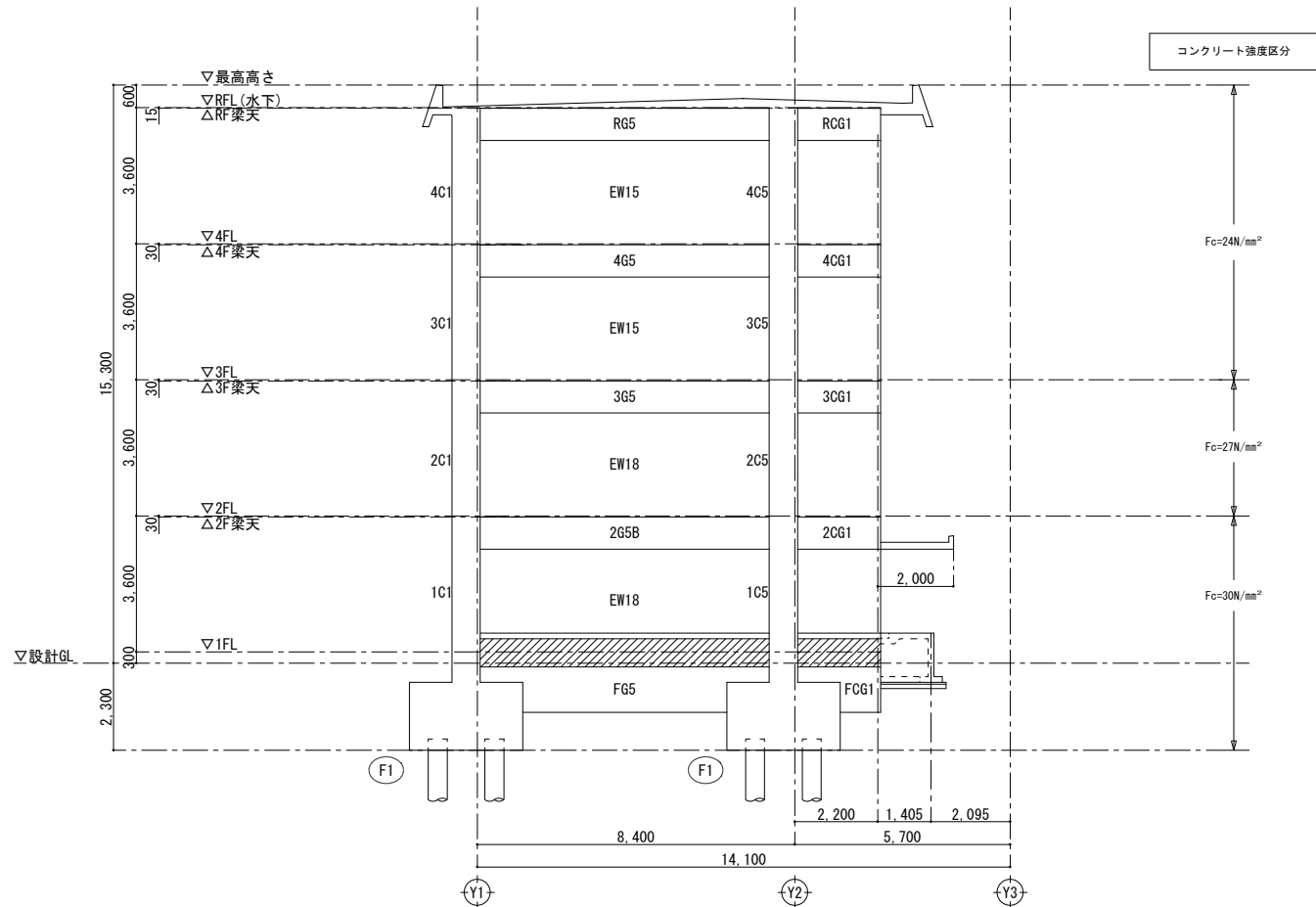
- 特記なき壁符号はW15を示す
- 印は垂直壁スリット位置を示す
- 印は水平壁スリット位置を示す
- 開口部寸法については意匠図参照の上施工図による
- 部は梁上端フカン部を示す

【構造設計図書の作成】
(有)鎌田建築構造設計事務所
構造設計一級建築士 第 3187号
一級建築士 第89816号 鎌田 次雄

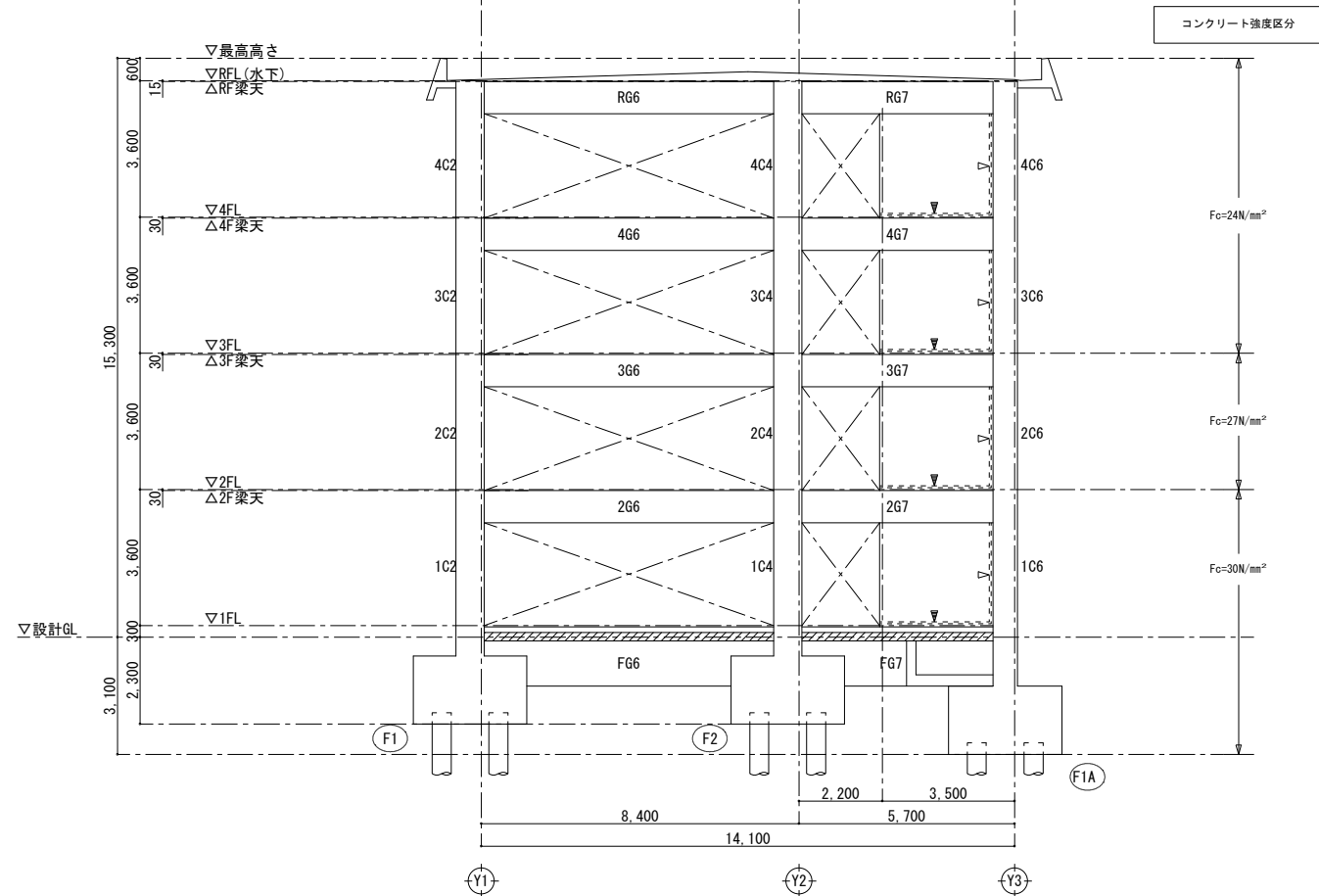
(有)新建築設計事務所 一級建築士 第 123921 号 黒木 博幸	吉野東中学校校舎増築その他本体工事		
	軸組図(1)	A3: 1/200	S-14
	鹿児島市建設局建築部建築課		



X1通り軸組図 A3 S=1:200



X3通り軸組図 A3 S=1:200



X2通り軸組図 A3 S=1:200

- 特記なき壁符号はW15を示す
- 印は垂直壁スリット位置を示す
- 印は水平壁スリット位置を示す
- 開口部寸法については意匠図参照の上施工図による
- 部は梁上端フカン部を示す

【構造設計図書の作成】
㈱鎌田建築構造設計事務所
構造設計一級建築士 第 3187号
一級建築士 第89816号 鎌田 次雄

㈱新建築設計事務所 一級建築士 第 123921 号 黒木 博幸	吉野東中学校校舎増築その他本体工事		
	軸組図(2)	A3: 1/200	S-15
	鹿児島市建設局建築部建築課		

柱リスト

A3 S=1:80

Y

B

D

X

<使用鉄筋>・D13:SD295・D25:SD345・U10.7:SBPD1275(ウルボン)

<使用コンクリート>・1階柱:F_c=30N/mm²、2階柱:F_c=27N/mm²、3・4階柱:F_c=24N/mm²

階	符 号	C1	C2	C3	C4	C5	C6
4 階	梁仕口内HOOP	□-D13#100	□-D13#100	□-D13#100	□-D13#100	□-D13#100	□-D13#100
	断 面						
	B×D	750×750	750×750	750×750	750×750	750×750	650×650
	主 筋	12-D25	18-D25	12-D25	14-D25	12-D25	12-D25
	帯 筋	□-D13#100	□-D13#100	□-D13#100	□-D13#100	□-D13#100	□-D13#100
3 階	梁仕口内HOOP	□-D13#100	□-D13#100	□-D13#100	□-D13#100	□-D13#100	□-D13#100
	断 面						
	B×D	750×750	750×750	750×750	750×750	750×750	650×650
	主 筋	12-D25	20-D25	12-D25	14-D25	12-D25	12-D25
	帯 筋	□-D13#100	≡-D13#100	□-D13#100	□-D13#100	□-D13#100	□-D13#100
2 階	梁仕口内HOOP	□-D13#100	□-D13#100	□-D13#100	□-D13#100	□-D13#100	□-D13#100
	断 面						
	B×D	750×750	750×750	750×750	750×750	750×750	650×650
	主 筋	14-D25	22-D25	14-D25	18-D25	12-D25	12-D25
	帯 筋	≡-D13#100	≡-U10.7#100	≡-U10.7#100	≡-D13#100	□-D13#100	□-D13#100
1 階	梁仕口内HOOP	□-D13#100	□-D13#100	□-D13#100	□-D13#100	□-D13#100	□-D13#100
	断 面						
	B×D	750×750	750×750	750×750	750×750	750×750	650×650
	主 筋	14-D25	26-D25	26-D25	26-D25	14-D25	16-D25
	帯 筋	≡-D13#100	≡-U10.7#100	≡-U10.7#100	≡-U10.7#100	≡-D13#100	□-D13#100
	梁仕口内HOOP	□-D13#100	□-D13#100	□-D13#100	□-D13#100	□-D13#100	□-D13#100

◦ U10.7は高強度せん断補強筋SBPD1275(ウルボン)を示し、溶接閉鎖型筋を用い

◦ 柱梁仕口内HOOPはリスト参照とする。

加工は工場にて適切な管理のもとで行う。

◦ 異形鉄筋D13を用いた帯筋・柱梁仕口内HOOPの形状はH型(135° 曲げフック)とする。

【構造設計図書の作成】
(有)鎌田建築構造設計事務所
構造設計一級建築士 第 3187号
一級建築士 第89816号 鎌田 次雄

(有)新建築設計事務所
一級建築士 第 123921 号
黒木 博幸

吉野東中学校校舎増築その他本体工事

柱リスト

A3: 1/80

鹿児島市建設局建築部建築課

S-16

階	符号	G 1		G 2		G 3		G 4		G 5	G 5 A	G 5 B	G 6		G 7		B 1			B 2															
		両 端	中 央	両 端	中 央	両 端	中 央	両 端	中 央	全断面	全断面	全断面	両 端	中 央	Y2通り端	中央・Y3通り端	X1通り端	中 央	X2通り端	X2通り端	中 央	X3通り端													
R階	断面																																		
		B × D		450 × 960		450 × 850		450 × 850		400 × 850			400 × 850		500 × 850		500 × 850		400 × 850			400 × 850													
		上端筋		6-D22		4-D22		7-D22		4-D22			4-D22		8-D22		5-D22		4-D22		4-D22		4-D22		7-D22		4-D22		4-D22						
		下端筋		4-D22		4-D22		4-D22		4-D22			4-D22		4-D22		5-D22		8-D22		4-D22		4-D22		4-D22		4-D22		4-D22						
		S T P		□-D13#200		□-D13#200		□-D13#200		□-D13#200			□-D13#200		□-D13#200		□-D13#200		□-D13#150		□-D10#150			□-D10#150											
腹筋		4-D10		2-D10		2-D10		2-D10		2-D10		2-D10		2-D10		2-D10		2-D10			2-D10														
4階	断面																																		
		B × D		450 × 900		450 × 850		450 × 850		400 × 850			400 × 600		500 × 850		500 × 850		400 × 850			400 × 850													
		上端筋		9-D22		5-D22		9-D22		5-D22			8-D22		5-D22		7-D22		4-D22		4-D22		4-D22		4-D22		4-D22		4-D22						
		下端筋		5-D22		5-D22		5-D22		5-D22			4-D22		4-D22		5-D22		8-D22		4-D22		4-D22		4-D22		5-D22		4-D22						
		S T P		□-D13#200		□-D13#150		□-D13#200		□-D13#200			□-D13#200		□-D13#200		□-D13#200		□-D13#150		□-D10#150			□-D10#150											
腹筋		4-D10		2-D10		2-D10		2-D10		2-D10		2-D10		2-D10		2-D10		2-D10			2-D10														
3階	断面																																		
		B × D		500 × 900		500 × 850		500 × 850		400 × 850			400 × 600		500 × 850		500 × 850		400 × 850			400 × 850													
		上端筋		9-D25		5-D25		9-D25		5-D25			8-D25		5-D25		7-D25		6-D25		4-D22		4-D22		4-D22		4-D22		4-D22						
		下端筋		7-D25		5-D25		5-D25		5-D25			4-D22		4-D22		5-D22		8-D22		4-D22		4-D22		4-D22		5-D22		4-D22						
		S T P		□-D13#150		□-D13#100		□-D13#200		□-D13#150			□-D13#200		□-D13#200		□-D13#200		□-D13#150		□-D10#150			□-D10#150											
腹筋		4-D10		2-D10		2-D10		2-D10		2-D10		2-D10		2-D10		2-D10		2-D10			2-D10														
2階	断面																																		
		B × D		550 × 900		600 × 850		600 × 850		650 × 850		400 × 850		400 × 600		400 × 850		500 × 850		500 × 850		400 × 850			400 × 850										
		上端筋		10-D25		6-D25		11-D25		6-D25		9-D25		6-D25		8-D25		6-D25		4-D22		4-D22		4-D25		10-D22		5-D22		5-D22		4-D22		4-D22	
		下端筋		8-D25		6-D25		8-D25		6-D25		6-D25		6-D25		5-D25		4-D22		4-D22		5-D22		9-D22		4-D22		4-D22		4-D22		4-D22			
		S T P		□-D13#100		□-D13#100		□-D13#150		□-D13#150		□-D13#200		□-D13#200		□-D13#200		□-D13#200		□-D13#150		□-D13#150			□-D10#150			□-D10#100							
腹筋		4-D10		2-D10		2-D10		2-D10		2-D10		2-D10		2-D10		2-D10		2-D10			2-D10														

◦ 巾止め筋はD10@1000以下とする。

◦ 梁二段筋のあきは1.5d(d：鉄筋径)とする。

◦ 大梁主筋のカットオフ長さは下記凡例による。

【構造設計図書の作成】

㈱鎌田建築構造設計事務所

構造設計一級建築士 第 3187号

一級建築士 第89816号 鎌田 次雄

㈱新建築設計事務所

一級建築士 第 123921 号

黒木 博幸



































吉野東中学校校舎増築その他本体工事

梁リスト (1)

A3: 1/80

鹿児島市建設局建築部建築課

S-17

梁リスト (2) A3 S=1/80										
<使用鉄筋>・D10、D13：SD295 ・D22、D25：SD345 <使用コンクリート>・2階梁：F _c =30N/mm ² 、・3階梁：F _c =27N/mm ² 、・4・R階梁：F _c =24N/mm ² とする。										
階	符 号	B 3		B 4	B 5		B 6	B 7	CG 1	CG 2
	位 置	両 端	中 央	全断面	両 端	中 央	全断面	全断面	全断面	全断面
R階	断 面	<全断面> 								
	B × D	350 × 850		350 × 700	350 × 700		250 × 500		400 × 850	350 × 700
	上端筋	3-D22		3-D22	3-D22	3-D22	2-D19		8-D25	3-D22
	下端筋	5-D22		3-D22	3-D22	5-D22	2-D19		8-D25	3-D22
	S T P	□-D13#100		□-D10#150	□-D10#150		□-D10#200		□-D13#150	□-D10#150
腹 筋	2-D10		2-D10	2-D10		2-D10	2-D10	2-D10	2-D10	
4階	断 面									
	B × D	350 × 850		350 × 700	350 × 700		250 × 500		400 × 850	350 × 700
	上端筋	3-D22	3-D22	3-D22	3-D22	3-D22	2-D19		8-D22	3-D22
	下端筋	3-D22	4-D22	3-D22	3-D22	5-D22	2-D19		8-D22	3-D22
	S T P	□-D10#150		□-D10#150	□-D10#150		□-D10#200		□-D13#150	□-D10#150
腹 筋	2-D10		2-D10	2-D10		2-D10	2-D10	2-D10		
3階	断 面									
	B × D	350 × 850		350 × 700	350 × 700		250 × 500		400 × 850	350 × 700
	上端筋	3-D22	3-D22	3-D22	3-D22	3-D22	2-D19		8-D22	3-D22
	下端筋	3-D22	4-D22	3-D22	3-D22	5-D22	2-D19		8-D22	3-D22
	S T P	□-D10#150		□-D10#150	□-D10#150		□-D10#200		□-D13#150	□-D10#150
腹 筋	2-D10		2-D10	2-D10		2-D10	2-D10	2-D10		
2階	断 面	<全断面> 								
	B × D	400 × 850		350 × 700	350 × 700		250 × 500	300 × 500	400 × 850	350 × 700
	上端筋	6-D22		3-D22	3-D22	3-D22	2-D19	3-D19	8-D25	3-D22
	下端筋	8-D22		3-D22	3-D22	5-D22	2-D19	3-D19	8-D25	3-D22
	S T P	□-D13#100		□-D10#150	□-D10#150		□-D10#200	□-D10#200	□-D13#100	□-D10#150
腹 筋	4-D10		2-D10	2-D10		2-D10	2-D10	2-D10	2-D10	

- 巾止め筋はD10@1000以下とする。
- 梁二段筋のあきは1.5d(d：鉄筋径)とする。
- 大梁主筋のカットオフ長さは下記凡例による。

【構造設計図書の作成】
(有)鎌田建築構造設計事務所
構造設計一級建築士 第 3187号
一級建築士 第89816号 鎌田 次雄

(有)新建築設計事務所
一級建築士 第 123921 号
黒木 博幸

吉野東中学校校舎増築その他本体工事

梁リスト (2)

A3: 1/80

鹿児島市建設局建築部建築課

S-18

壁リストA3 S=1:60

<使用鉄筋>・D10～D16:SD295・ダブル配筋の場合、巾止め筋はD10@1000以下とする

<使用コンクリート>・1階壁:Fc=30N/mm²、2階壁:Fc=27N/mm²、3・4階壁:Fc=24N/mm²

符 号	W15	EW15	EW18			開口部補強要領図
断 面 (垂直断面)						
壁 厚	150	150	180			
配筋タイプ	シングル	シングル	ダブル			
縦 筋	D10@150	D10@150	D10@200			
横 筋	D10@150	D10@150	D10@200			
開口部補強	縦 筋	1-D13	—	—		
	横 筋	1-D13	—	—		
	斜 筋	1-D13	—	—		

スラブリスト

<使用鉄筋>・D10, D13:SD295

<使用コンクリート>・2階床:Fc=30N/mm²、3階床:Fc=27N/mm²、4・R階床:Fc=24N/mm²

符 号	版 厚 (t)	位 置	短辺方向		(主筋方向)	長辺方向			備 考
			柱間帯		柱列帯	柱間帯		柱列帯	
			端 部	中 央	全 断	端 部	中 央	全 断	
RS1	150	上端筋		D10D13@200			D10@250		モチアミ配筋
		下端筋		D10@200			D10@250		
RS2	150	上端筋		D10D13@200			D10@200		モチアミ配筋
		下端筋		D10@200			D10@200		
4～1S1	150	上端筋		D10D13@200			D10@250		モチアミ配筋
		下端筋		D10@200			D10@250		
4～1S2	150	上端筋		D10D13@150			D10@200		モチアミ配筋
		下端筋		D10@150			D10@200		
RCS1	150	上端筋		D13@200			D10@200		モチアミ配筋
		下端筋		D10@200			D10@200		
RCS2	150	上端筋		D13@200			D10@200		モチアミ配筋
		下端筋		D10@200			D10@200		
RCS3	150	上端筋		D10D13@200			D10@200		モチアミ配筋
		下端筋		D10@200			D10@200		
4～2CS3	150	上端筋		D10D13@200			D10@200		モチアミ配筋
		下端筋		D10@200			D10@200		
2CS4	200	上端筋		D13@150			D10@200		モチアミ配筋
		下端筋		D10@150			D10@200		
FS1	250	上端筋		D13@200			D13@200		モチアミ配筋 ＜EVビット＞
		下端筋		D13@200			D13@200		

【構造設計図書の作成】
㈱鎌田建築構造設計事務所
構造設計一級建築士 第 3187号
一級建築士 第89816号 鎌田 次雄

(有)新建築設計事務所
一級建築士 第 123921 号
黒木 博幸

吉野東中学校校舎増築その他本体工事

壁リスト、スラブリストA3: 1/60

鹿児島市建設局建築部建築課

S-19

RCS 1 配筋図	A3=1:60	RCS 2 配筋図	A3=1:60	RCS 3 配筋図	A3=1:60	4～2CS 3 配筋図	A3=1:60	2CS 4 配筋図	A3=1:60
小庇配筋図	A3=1:60	パラベット配筋図	A3=1:60	スラブ勾配による梁増打補強要領図	NO SCALE	配膳室前WF 1 配筋図	A3=1:60	EVピット(FS 1)配筋図	A3=1:60
スラブ開口補強要領図	NO SCALE	壁スリット要領図	NO SCALE	水平スリット範囲凡例	NO SCALE				

【構造設計図書の作成】
㈲鎌田建築構造設計事務所
構造設計一級建築士 第 3187号
一級建築士 第89816号 鎌田 次雄

㈲新建築設計事務所
一級建築士 第 123921 号
黒木 博幸

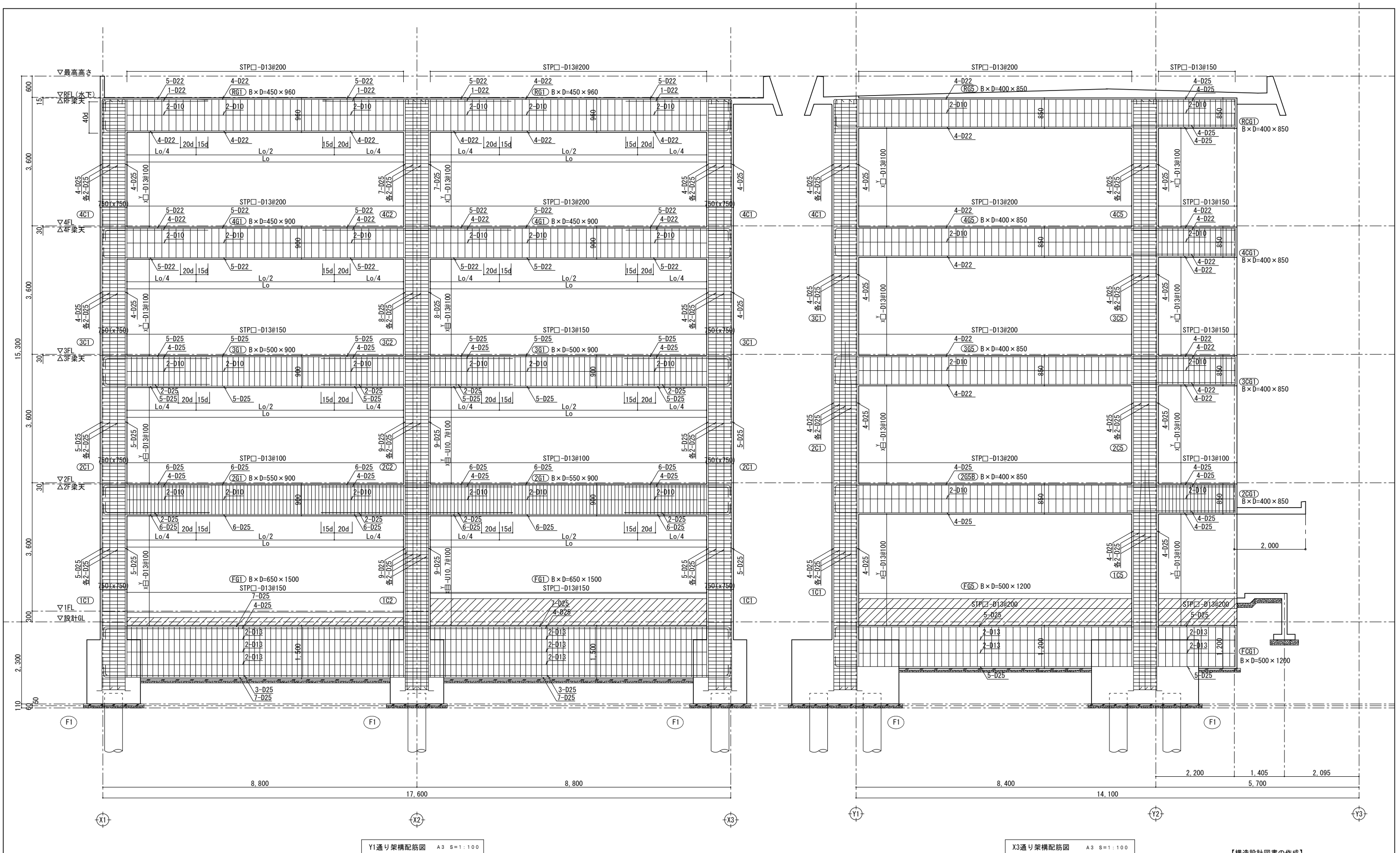
吉野東中学校校舎増築その他本体工事

雑配筋図

A3:1/60

鹿児島市建設局建築部建築課

S-20



- ・市止め筋はD10@1000以下とする。
- ・梁二段筋のあきは1.5d (d:鉄筋径)とする。
- ・梁仕口内H.O.O.Pは@100とする。
- ・柱の四隅にある主筋で、重ね継手の場合及び最上層の柱頭にある場合には、フックを付ける。

【構造設計図書の作成】
㈱鎌田建築構造設計事務所
構造設計一級建築士 第 3187号
一級建築士 第89816号 鎌田 次雄

㈱新建築設計事務所
一級建築士 第 123921 号
黒木 博幸

吉野東中学校校舎増築その他本体工事

架構配筋図 A3: 1/100

鹿児島市建設局建築部建築課